

第5章 子どもの学び

1. 子どもの学習状況

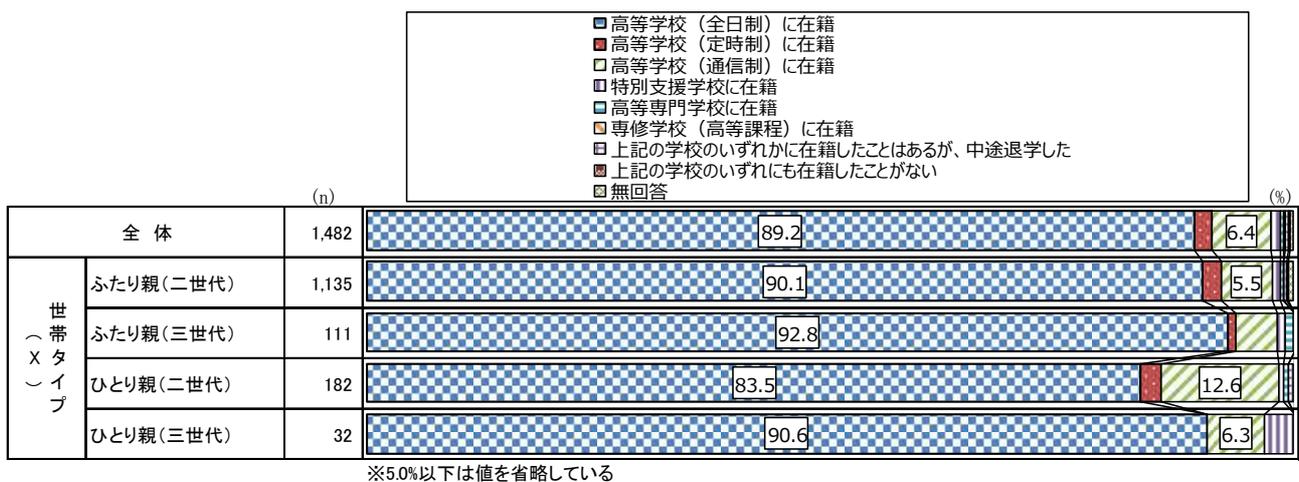
(1) 就学状況

子どもに就学状況について聞いたところ、「高等学校（全日制）に在籍」している割合は 89.2%、「高等学校（定時制）に在籍」している割合は 1.9%、「高等学校（通信制）に在籍」している割合は 6.4%、「特別支援学校に在籍」している割合は 1.1%、「高等専門学校に在籍」している割合は 0.3%、「専修学校（高等課程）に在籍」している割合は 0.1%、「上記の学校のいずれかに在籍したことはあるが、中途退学した」割合は 0.3%、「上記の学校のいずれにも在籍したことがない」割合は 0.2%であった。なお、生活困難度別・世帯タイプ別のいずれについても、統計的に有意な差は確認されなかった。

図表 5-1-1 就学状況：全体、生活困難度別（X）



図表 5-1-2 就学状況：全体、世帯タイプ別（X）



図表 5-1-3 就学状況：全体、生活困難度別（X）、世帯タイプ別（X）

		該当数	籍高等学校（全日制）に在	籍高等学校（定時制）に在	籍高等学校（通信制）に在	特別支援学校に在籍	高等専門学校に在籍	在籍専修学校（高等課程）に	中途退学したことはあるが、上記の学校のいずれかに在籍したことはあるが、上記の学校のいずれにも在籍したことがない	上記の学校のいずれにも在籍したことがない	無回答
全体		1,482 100.0	1,322 89.2	28 1.9	95 6.4	16 1.1	5 0.3	2 0.1	4 0.3	3 0.2	7 0.5
生活困難度 （X） （X）	困窮層	55 100.0	45 81.8	3 5.5	7 12.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
	周辺層	97 100.0	81 83.5	1 1.0	12 12.4	2 2.1	0 0.0	0 0.0	1 1.0	0 0.0	0 0.0
	一般層	838 100.0	757 90.3	17 2.0	48 5.7	7 0.8	3 0.4	1 0.1	2 0.2	1 0.1	2 0.2
世帯タイプ （X） （X）	ふたり親（二世帯）	1,135 100.0	1,023 90.1	23 2.0	62 5.5	11 1.0	3 0.3	1 0.1	3 0.3	3 0.3	6 0.5
	ふたり親（三世帯）	111 100.0	103 92.8	1 0.9	5 4.5	1 0.9	1 0.9	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
	ひとり親（二世帯）	182 100.0	152 83.5	4 2.2	23 12.6	1 0.5	1 0.5	0 0.0	1 0.5	0 0.0	0 0.0
	ひとり親（三世帯）	32 100.0	29 90.6	0 0.0	2 6.3	1 3.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

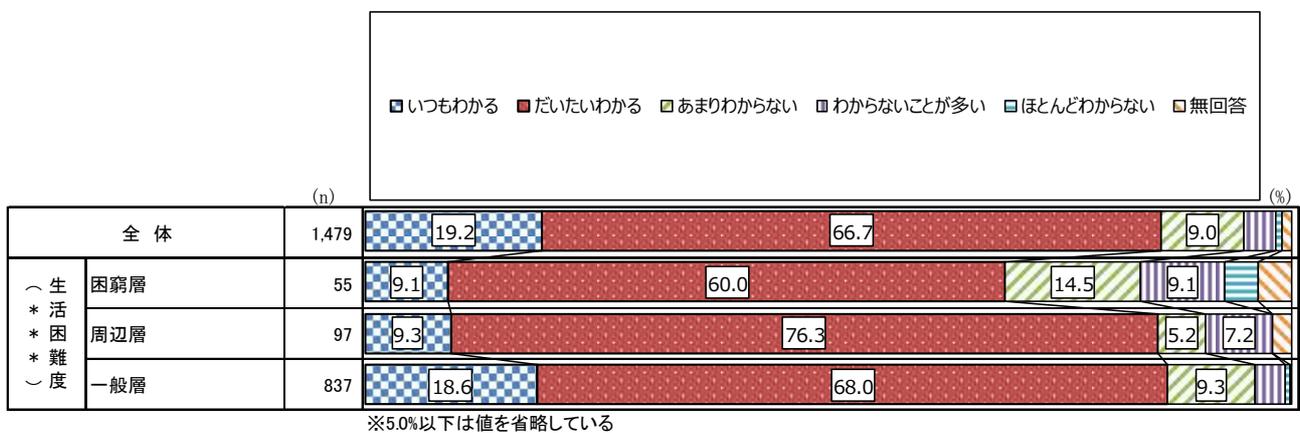
(2) 授業の理解度

子ども本人に、「学校の授業がわからないことがありますか」と聞いたところ、19.2%が「いつもわかる」、66.7%が「だいたいわかる」と答えており、合わせて 85.9%が学校の授業が理解できると回答している。一方で、9.0%が「あまりわからない」、3.4%が「わからないことが多い」、0.7%が「ほとんどわからない」と回答しており、学習に課題を抱える子どもが1割強存在する。

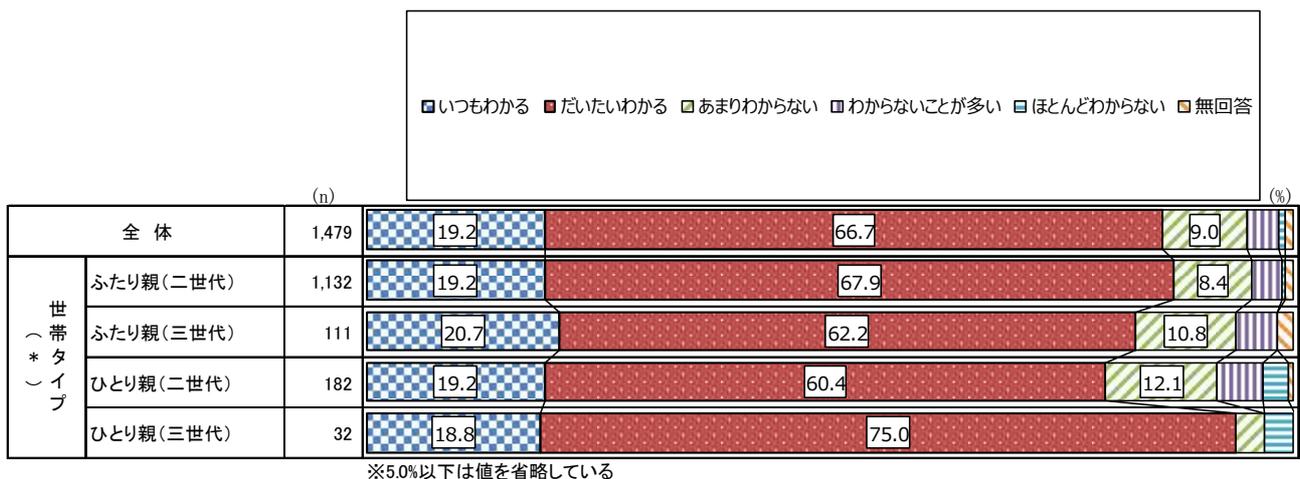
生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が確認され、困窮層にて「いつもわかる」と回答した子どもは 9.1%となっており、これは、一般層の 18.6%に比べ 9.5 ポイント低い。困窮層の 27.2%は、学校の授業がわからない（「あまりわからない」14.5%、「わからないことが多い」9.1%、「ほとんどわからない」3.6%）と答えている。

世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差が確認され、授業が「いつもわかる」「だいたいわかる」と回答した子どもは、ひとり親（三世代）、ふたり親（二世代）、ふたり親（三世代）、ひとり親（二世代）の順で多い。

図表 5-1-4 授業の理解度：全体、生活困難度別 (***)



図表 5-1-5 授業の理解度：全体、世帯タイプ別 (*)



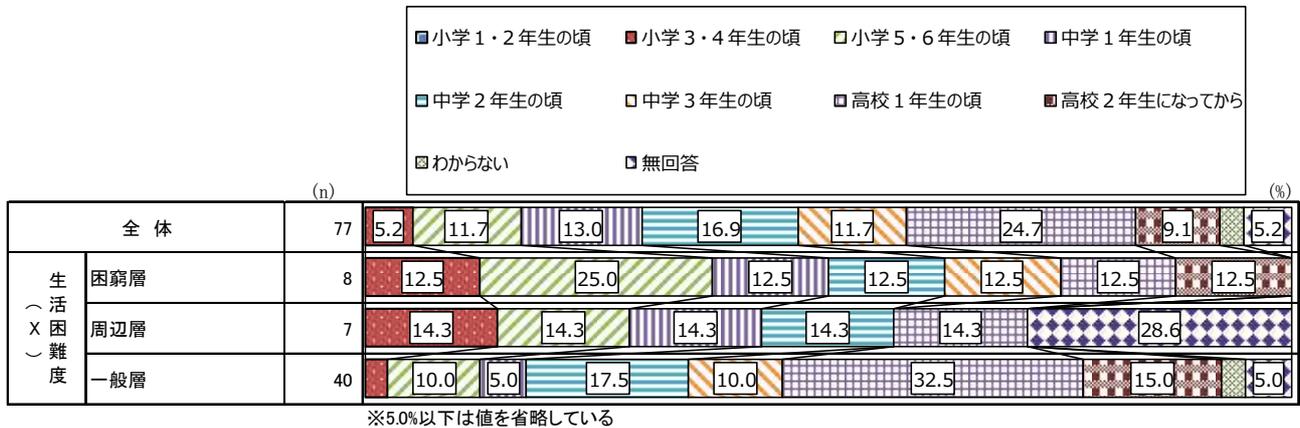
図表 5-1-6 授業の理解度：全体、生活困難度別 (***)、世帯タイプ別 (*)

		該当数	いつもわかる	だいたいわかる	あまりわからない	わからないことが多い	ほとんどわからない	無回答
全体		1,479 100.0	284 19.2	986 66.7	133 9.0	51 3.4	10 0.7	15 1.0
生活困難度 (***)	困窮層	55 100.0	5 9.1	33 60.0	8 14.5	5 9.1	2 3.6	2 3.6
	周辺層	97 100.0	9 9.3	74 76.3	5 5.2	7 7.2	0 0.0	2 2.1
	一般層	837 100.0	156 18.6	569 68.0	78 9.3	28 3.3	5 0.6	1 0.1
世帯タイプ (*)	ふたり親(二世帯)	1,132 100.0	217 19.2	769 67.9	95 8.4	37 3.3	4 0.4	10 0.9
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	23 20.7	69 62.2	12 10.8	5 4.5	0 0.0	2 1.8
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	35 19.2	110 60.4	22 12.1	9 4.9	5 2.7	1 0.5
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	6 18.8	24 75.0	1 3.1	0 0.0	1 3.1	0 0.0

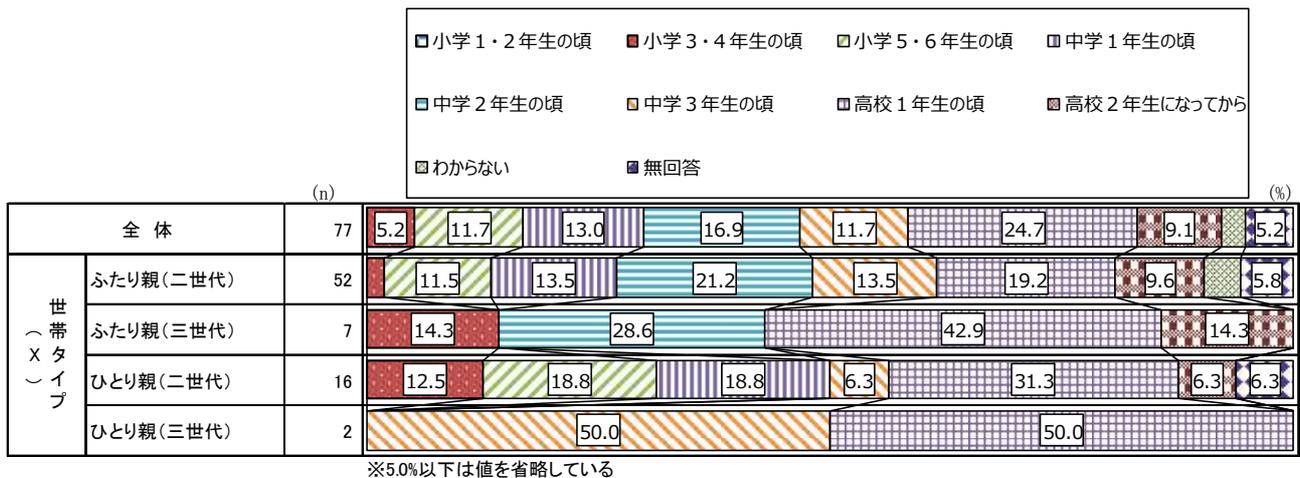
(3) 授業がわからなくなった時期

次に、授業が「わからないことが多い」または「ほとんどわからない」と答えた子どもに、いつからわからなくなったのか聞いた。すると、「高校1年生の頃」が最も多く24.7%、次が「中学2年生の頃」の16.9%であった。生活困難度別・世帯タイプ別には、統計的に有意な差は確認されなかった。

図表 5-1-7 授業がわからなくなった時期：全体、生活困難度別 (X)



図表 5-1-8 授業がわからなくなった時期：全体、世帯タイプ別 (X)



図表 5-1-9 授業がわからなくなった時期：全体、生活困難度別（X）、世帯タイプ別（X）

		該当数	小学 1・2 年生の 頃	小学 3・4 年生の 頃	小学 5・6 年生の 頃	中学 1年生 の頃	中学 2年生 の頃	中学 3年生 の頃	高校 1年生 の頃	高校 2年生 になっ てから	わか らない	無回 答
全体		77 100.0	0 0.0	4 5.2	9 11.7	10 13.0	13 16.9	9 11.7	19 24.7	7 9.1	2 2.6	4 5.2
生活 困難 度 （X） （X）	困窮層	8 100.0	0 0.0	1 12.5	2 25.0	1 12.5	1 12.5	1 12.5	1 12.5	1 12.5	0 0.0	0 0.0
	周辺層	7 100.0	0 0.0	1 14.3	1 14.3	1 14.3	1 14.3	0 0.0	1 14.3	0 0.0	0 0.0	2 28.6
	一般層	40 100.0	0 0.0	1 2.5	4 10.0	2 5.0	7 17.5	4 10.0	13 32.5	6 15.0	1 2.5	2 5.0
世帯 タイプ （X） （X）	ふたり親（二世帯）	52 100.0	0 0.0	1 1.9	6 11.5	7 13.5	11 21.2	7 13.5	10 19.2	5 9.6	2 3.8	3 5.8
	ふたり親（三世帯）	7 100.0	0 0.0	1 14.3	0 0.0	0 0.0	2 28.6	0 0.0	3 42.9	1 14.3	0 0.0	0 0.0
	ひとり親（二世帯）	16 100.0	0 0.0	2 12.5	3 18.8	3 18.8	0 0.0	1 6.3	5 31.3	1 6.3	0 0.0	1 6.3
	ひとり親（三世帯）	2 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 50.0	1 50.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

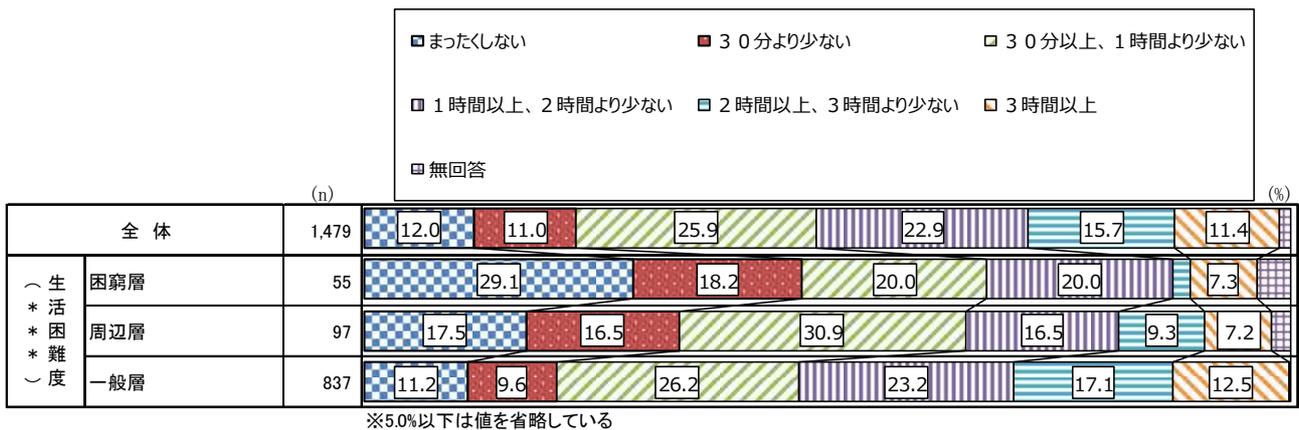
(4) 授業以外の勉強時間

次に、月曜日～金曜日の、学校の授業以外の勉強時間について聞いた。すると、「30分以上、1時間より少ない」と回答した割合が最も高く、25.9%であった。また、「まったくしない」と回答した子どもは12.0%であった。

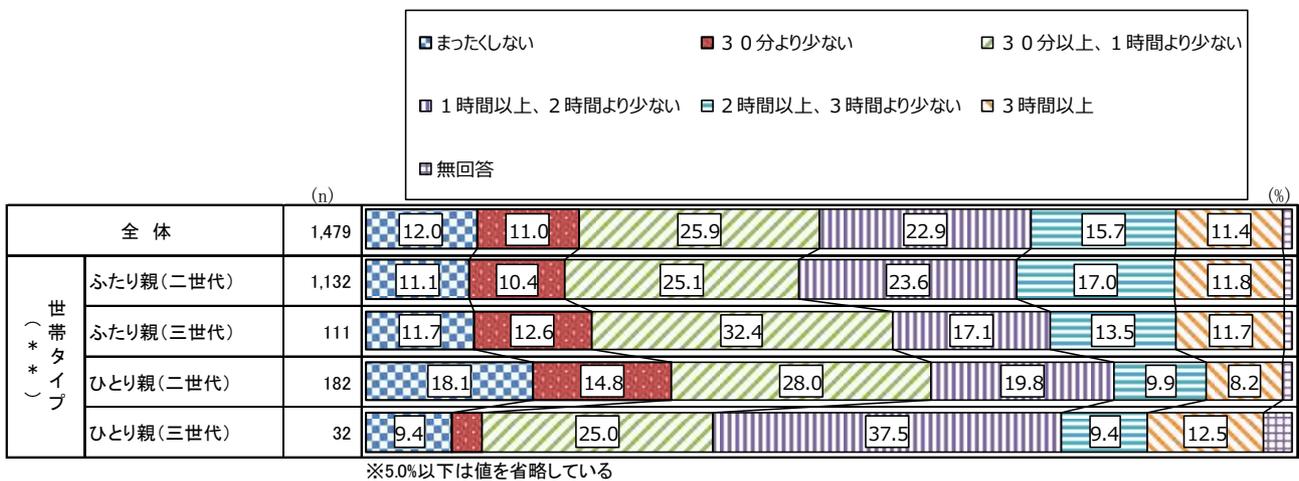
生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が確認され、「まったくしない」と回答した割合が一般層では11.2%であったのに対し、困窮層では29.1%にのぼる等、生活困難度が高まるほど勉強時間が短くなる傾向が見られる。

世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差が確認され、ひとり親（二世帯）世帯の子どもの勉強時間が他と比較して短い傾向が見られた。

図表 5-1-10 学校の授業以外の勉強時間：全体、生活困難度別（***）



図表 5-1-11 学校の授業以外の勉強時間：全体、世帯タイプ別（**）



図表 5-1-12 学校の授業以外の勉強時間：全体、生活困難度別 (***)、世帯タイプ別 (**)

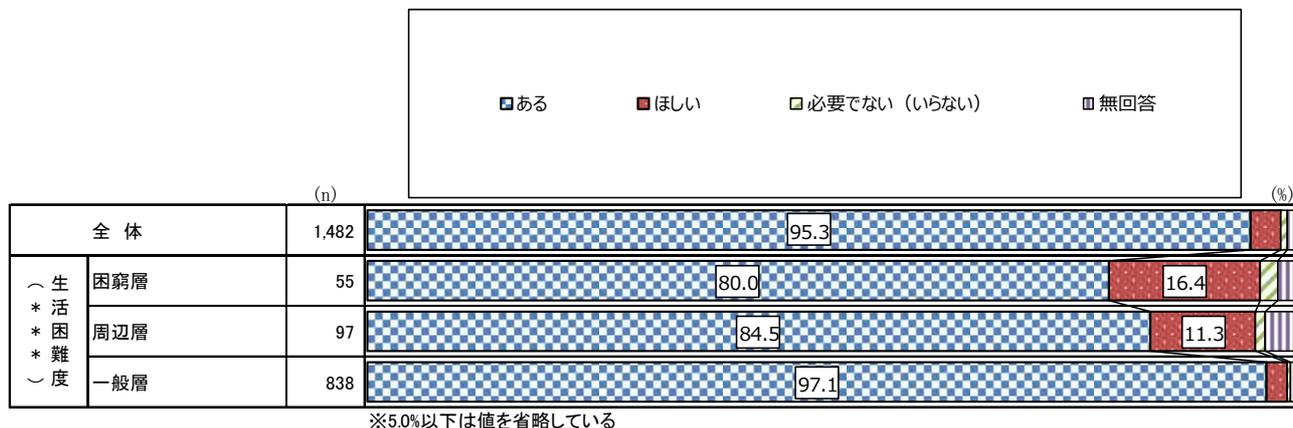
		該当数	まったくしない	30分より少ない	30分以上、1時間より少ない	1時間以上、2時間より少ない	2時間以上、3時間より少ない	3時間以上	無回答
全体		1,479 100.0	177 12.0	163 11.0	383 25.9	338 22.9	232 15.7	169 11.4	17 1.1
生活困難度 (***)	困窮層	55 100.0	16 29.1	10 18.2	11 20.0	11 20.0	1 1.8	4 7.3	2 3.6
	周辺層	97 100.0	17 17.5	16 16.5	30 30.9	16 16.5	9 9.3	7 7.2	2 2.1
	一般層	837 100.0	94 11.2	80 9.6	219 26.2	194 23.2	143 17.1	105 12.5	2 0.2
世帯タイプ (***)	ふたり親(二世帯)	1,132 100.0	126 11.1	118 10.4	284 25.1	267 23.6	193 17.0	134 11.8	10 0.9
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	13 11.7	14 12.6	36 32.4	19 17.1	15 13.5	13 11.7	1 0.9
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	33 18.1	27 14.8	51 28.0	36 19.8	18 9.9	15 8.2	2 1.1
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	3 9.4	1 3.1	8 25.0	12 37.5	3 9.4	4 12.5	1 3.1

(5) 自宅の学習環境

自宅の学習環境を把握するために、子ども本人に「家の中で勉強ができる場所」があるか否かを聞いた。「ある」と回答した割合は95.3%であった。

生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が確認され、生活困難度が高いほど「ある」と回答した割合が低く、「ほしい」と回答した割合が高かった。なお、世帯タイプ別には統計的に有意な差は確認されなかった。

図表 5-1-13 家の中で勉強ができる場所：全体、生活困難度別 (***)



図表 5-1-14 家の中で勉強ができる場所：全体、世帯タイプ別 (X)



図表 5-1-15 家の中で勉強ができる場所：全体、生活困難度別 (***)、世帯タイプ別 (X)

		該当数	ある (できる)	ほしい (したい)	必要でない (いらぬ)	無回答
全 体		1,482 100.0	1,413 95.3	49 3.3	10 0.7	10 0.7
生活 困難 度	困窮層	55 100.0	44 80.0	9 16.4	1 1.8	1 1.8
	周辺層	97 100.0	82 84.5	11 11.3	1 1.0	3 3.1
	一般層	838 100.0	814 97.1	18 2.1	3 0.4	3 0.4
世帯 タイプ	ふたり親(二世代)	1,135 100.0	1,086 95.7	35 3.1	7 0.6	7 0.6
	ふたり親(三世代)	111 100.0	107 96.4	3 2.7	1 0.9	0 0.0
	ひとり親(二世代)	182 100.0	167 91.8	11 6.0	2 1.1	2 1.1
	ひとり親(三世代)	32 100.0	32 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

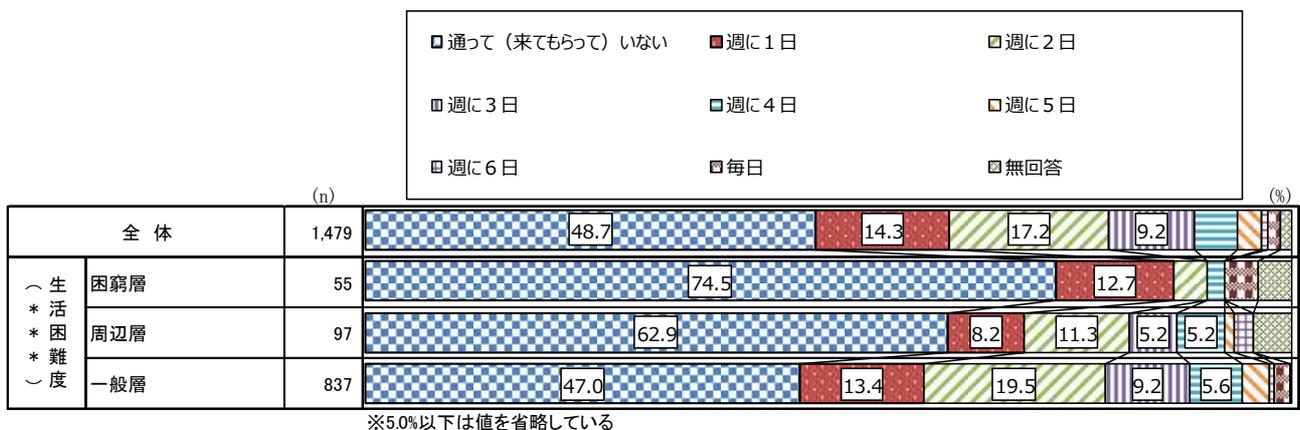
(6) 塾や家庭教師の有無

通塾（又は家庭教師）については、「通って（来てもらって）いない」割合は48.7%であり、約5割が学習塾に通っている。また最も多い頻度は「週に2日」（17.2%）であり、次いで「週に1日」（14.3%）、「週に3日」（9.2%）であった。

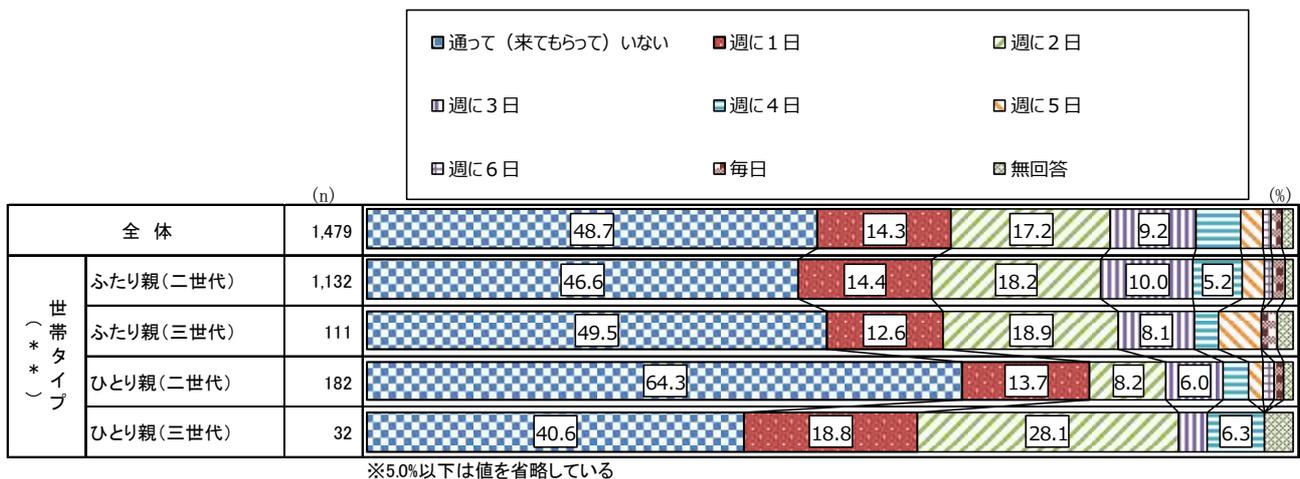
生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が確認され、「通って（来てもらって）いない」割合は、一般層では47.0%であったのに対し、困窮層では74.5%にのぼる等、生活困難度が高いほど通塾率が低く、また通塾頻度が少ない傾向が見られた。

世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差が確認され、特にひとり親（二世帯）世帯にて「通って（来てもらって）いない」割合が64.3%にのぼる等、通塾率が低く、また通塾頻度が少ない傾向が見られた。

図表 5-1-16 塾や家庭教師の有無：全体、生活困難度別 (***)



図表 5-1-17 塾や家庭教師の有無：全体、世帯タイプ別 (**)



図表 5-1-18 塾や家庭教師の有無：全体、生活困難度別 (***)、世帯タイプ別 (**)

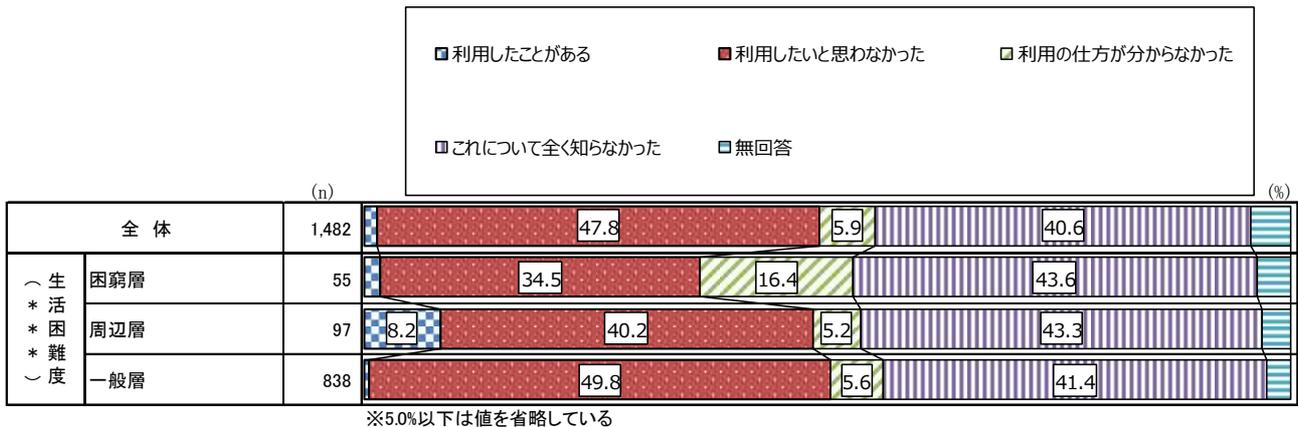
		該当数	い通 ない （来 ても ら つ て）	週 に 1 日	週 に 2 日	週 に 3 日	週 に 4 日	週 に 5 日	週 に 6 日	毎 日	無 回 答
全 体		1,479 100.0	720 48.7	212 14.3	255 17.2	136 9.2	70 4.7	37 2.5	11 0.7	20 1.4	18 1.2
（ 生 * 活 * 困 * 難 * 度 ）	困窮層	55 100.0	41 74.5	7 12.7	2 3.6	0 0.0	1 1.8	0 0.0	0 0.0	2 3.6	2 3.6
	周辺層	97 100.0	61 62.9	8 8.2	11 11.3	5 5.2	5 5.2	1 1.0	2 2.1	0 0.0	4 4.1
	一般層	837 100.0	393 47.0	112 13.4	163 19.5	77 9.2	47 5.6	24 2.9	5 0.6	15 1.8	1 0.1
（ 世 * 帯 * タ * イ * プ ）	ふたり親(二世帯)	1,132 100.0	527 46.6	163 14.4	206 18.2	113 10.0	59 5.2	29 2.6	9 0.8	16 1.4	10 0.9
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	55 49.5	14 12.6	21 18.9	9 8.1	3 2.7	5 4.5	0 0.0	2 1.8	2 1.8
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	117 64.3	25 13.7	15 8.2	11 6.0	5 2.7	3 1.6	2 1.1	2 1.1	2 1.1
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	13 40.6	6 18.8	9 28.1	1 3.1	2 6.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 3.1

2. 学習支援事業

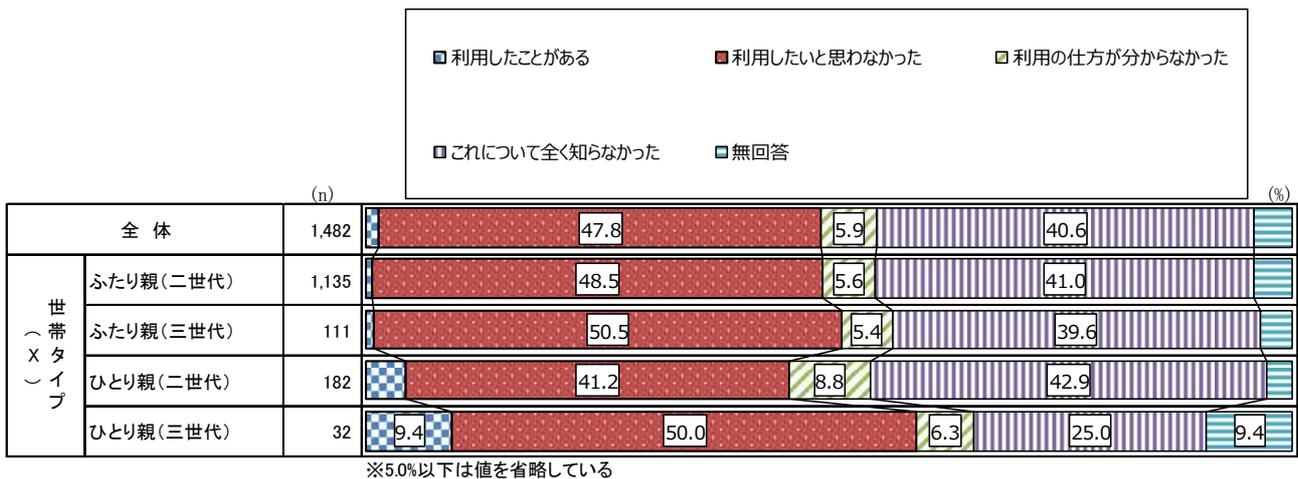
子ども本人に、各種の学習支援事業の利用状況や利用意向について聞いた。まず、無料学習支援の利用状況について聞いたところ、「利用したことがある」割合は 1.4%にとどまった。一方で、利用したことがない理由として「利用の仕方が分からなかった」割合は 5.9%であり、「これについて全く知らなかった」割合は 40.6%であった。

無料学習支援について、生活困難度別に見ると統計的に有意な差が確認され、「利用したいと思わなかった」割合は一般層では 49.8%であったのに対し、困窮層では 34.5%にとどまる。代わりに、「利用の仕方が分からなかった」割合は一般層では 5.6%であったのに対し、困窮層では 16.4%にのぼった。なお、世帯タイプ別には、統計的に有意な差は確認されなかった。

図表 5-2-1 無料学習支援の利用状況：全体、生活困難度別 (***)



図表 5-2-2 無料学習支援の利用状況：全体、世帯タイプ別 (X)



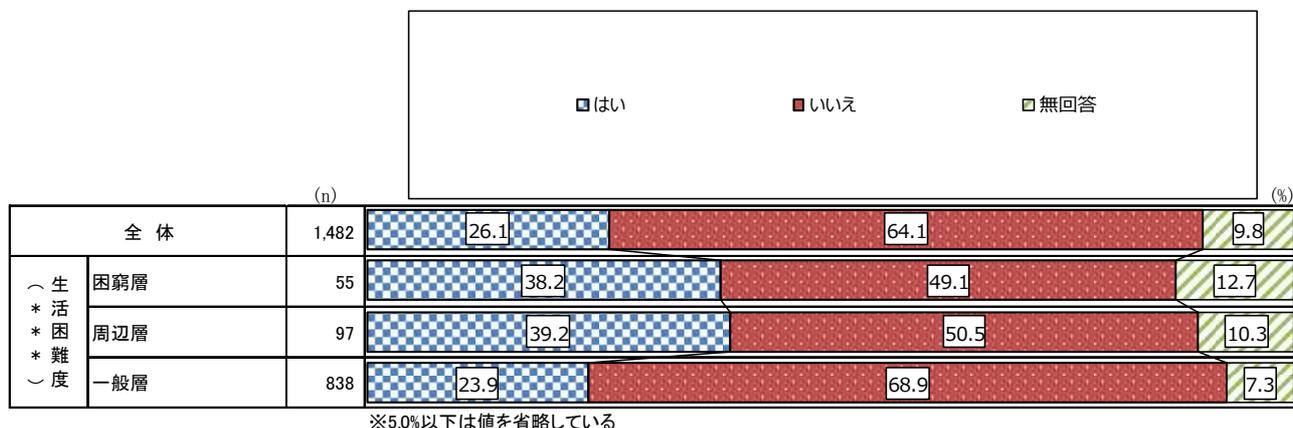
図表 5-2-3 無料学習支援の利用状況：全体、生活困難度別 (***)、世帯タイプ別 (X)

		該当数	利用したことがある	利用したいと思わなかった	利用の仕方が分からない	これについて全く知らない	無回答
全体		1,482 100.0	21 1.4	708 47.8	88 5.9	602 40.6	63 4.3
生活困難度 (***)	困窮層	55 100.0	1 1.8	19 34.5	9 16.4	24 43.6	2 3.6
	周辺層	97 100.0	8 8.2	39 40.2	5 5.2	42 43.3	3 3.1
	一般層	838 100.0	5 0.6	417 49.8	47 5.6	347 41.4	22 2.6
世帯タイプ (X)	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	9 0.8	551 48.5	63 5.6	465 41.0	47 4.1
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	1 0.9	56 50.5	6 5.4	44 39.6	4 3.6
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	8 4.4	75 41.2	16 8.8	78 42.9	5 2.7
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	3 9.4	16 50.0	2 6.3	8 25.0	3 9.4

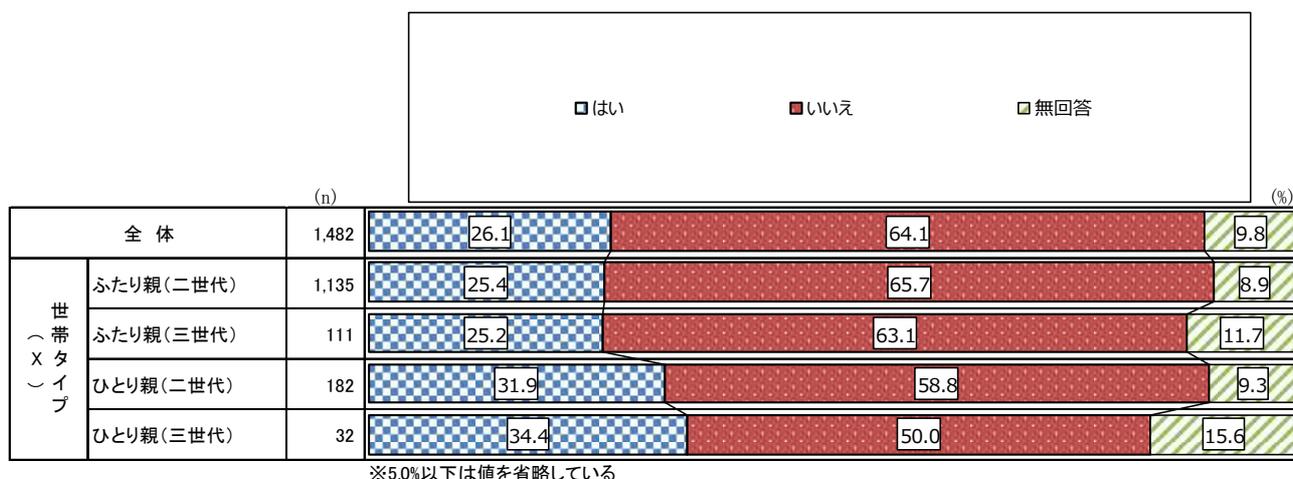
次に、無料学習支援の利用意向について、「機会があれば、利用したいか」を聞いたところ、「はい」と回答した割合は26.1であった。

無料学習支援について、生活困難度別に見ると統計的に有意な差が確認され、「はい」と回答した割合は一般層では23.9%であったのに対し、困窮層では38.2%、周辺層では39.2%にのぼった。なお、世帯タイプ別には、統計的に有意な差は確認されなかった。

図表 5-2-4 無料学習支援の利用意向：全体、生活困難度別 (***)



図表 5-2-5 無料学習支援の利用意向：全体、世帯タイプ別 (X)



図表 5-2-6 無料学習支援の利用意向：全体、生活困難度別 (***)、世帯タイプ別 (X)

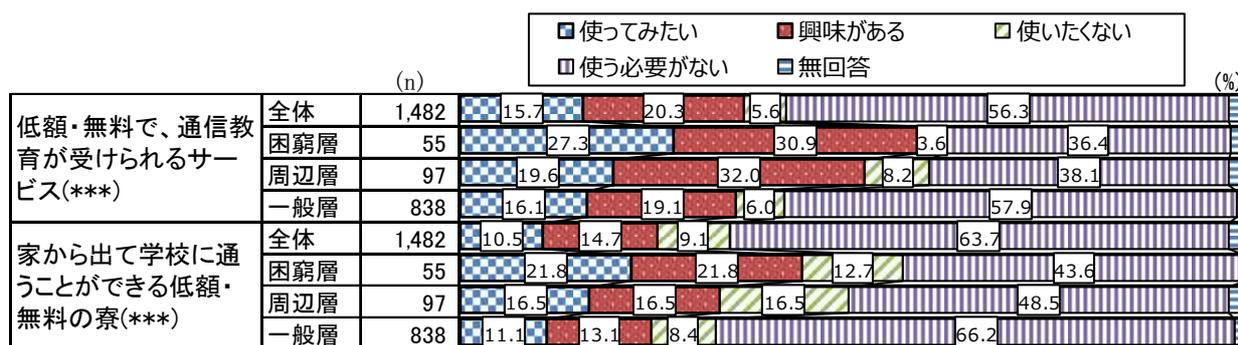
		該当数	はい	いいえ	無回答
全体		1,482 100.0	387 26.1	950 64.1	145 9.8
生活困難度 (***)	困窮層	55 100.0	21 38.2	27 49.1	7 12.7
	周辺層	97 100.0	38 39.2	49 50.5	10 10.3
	一般層	838 100.0	200 23.9	577 68.9	61 7.3
世帯タイプ (X)	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	288 25.4	746 65.7	101 8.9
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	28 25.2	70 63.1	13 11.7
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	58 31.9	107 58.8	17 9.3
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	11 34.4	16 50.0	5 15.6

次に、「低額・無料で、通信教育が受けられるサービス」「家から出て学校に通うことができる低額・無料の寮」について利用意向を聞いたところ、「使ってみたい」「興味がある」と回答した割合は「低額・無料で、通信教育が受けられるサービス」では 36.0%、「家から出て学校に通うことができる低額・無料の寮」では 25.2%にのぼった。

いずれも生活困難度別に見ると統計的に有意な差が確認され、それぞれ、一般層では「使ってみたい」「興味がある」と回答した割合が 35.2%、24.2%であったのに対し、困窮層では 58.2%、43.6%にのぼった。

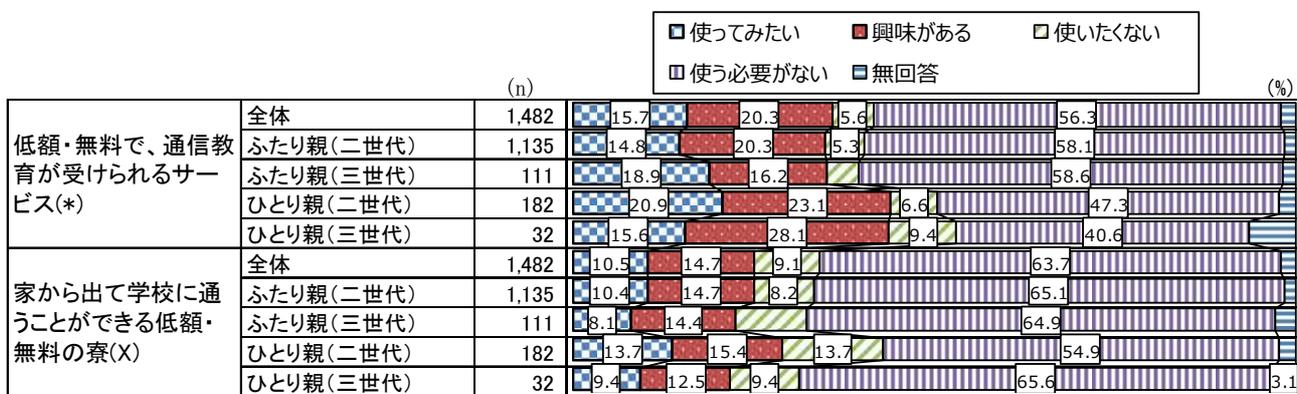
また、「低額・無料で、通信教育が受けられるサービス」については世帯タイプ別に見ると統計的に有意な差が確認され、ひとり親（二世帯）にて「使ってみたい」「興味がある」と回答した割合が 44.0%と高い傾向があった。

図表 5-2-7 各種学習支援事業の利用意向：全体、生活困難度別



※5.0%以下は値を省略している

図表 5-2-8 各種学習支援事業の利用意向：全体、世帯タイプ別



※5.0%以下は値を省略している

図表 5-2-9 各種学習支援事業の利用意向：全体、生活困難度別

		該当数	使 っ て み た い	興 味 が あ る	使 い た く な い	使 う 必 要 が な い	無 回 答
育低額 が受・ けら れ る サ ー ビ ス （ * * * * ）	全体	1,482 100.0	233 15.7	301 20.3	83 5.6	835 56.3	30 2.0
	困窮層	55 100.0	15 27.3	17 30.9	2 3.6	20 36.4	1 1.8
	周辺層	97 100.0	19 19.6	31 32.0	8 8.2	37 38.1	2 2.1
	一般層	838 100.0	135 16.1	160 19.1	50 6.0	485 57.9	8 1.0
家 か ら 出 て 学 校 に 通 う こ と の 寮 （ * * * * ） 料 の 無	全体	1,482 100.0	155 10.5	218 14.7	135 9.1	944 63.7	30 2.0
	困窮層	55 100.0	12 21.8	12 21.8	7 12.7	24 43.6	0 0.0
	周辺層	97 100.0	16 16.5	16 16.5	16 16.5	47 48.5	2 2.1
	一般層	838 100.0	93 11.1	110 13.1	70 8.4	555 66.2	10 1.2

図表 5-2-10 各種学習支援事業の利用意向：全体、世帯タイプ別

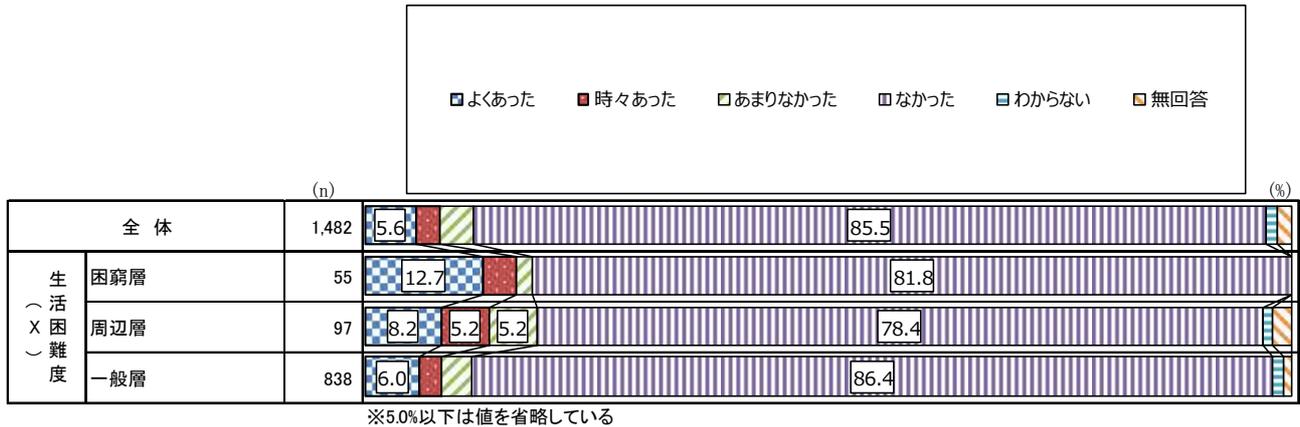
		該当数	使 っ て み た い	興 味 が あ る	使 い た く な い	使 う 必 要 が な い	無 回 答
低 額 ・ 無 料 で 、 サ ー ビ ス （ * ） が 受	全体	1,482 100.0	233 15.7	301 20.3	83 5.6	835 56.3	30 2.0
	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	168 14.8	230 20.3	60 5.3	659 58.1	18 1.6
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	21 18.9	18 16.2	5 4.5	65 58.6	2 1.8
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	38 20.9	42 23.1	12 6.6	86 47.3	4 2.2
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	5 15.6	9 28.1	3 9.4	13 40.6	2 6.3
で 家 か ら 出 て 学 校 に 通 う こ と が	全体	1,482 100.0	155 10.5	218 14.7	135 9.1	944 63.7	30 2.0
	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	118 10.4	167 14.7	93 8.2	739 65.1	18 1.6
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	9 8.1	16 14.4	11 9.9	72 64.9	3 2.7
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	25 13.7	28 15.4	25 13.7	100 54.9	4 2.2
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	3 9.4	4 12.5	3 9.4	21 65.6	1 3.1

3. 不登校・いじめの経験

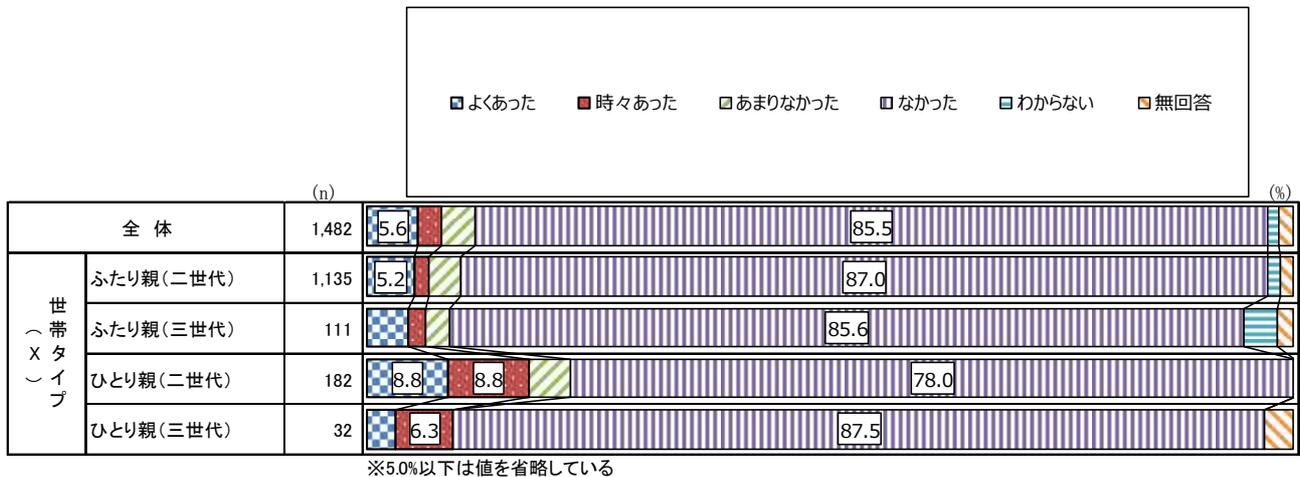
(1) 不登校経験

ここでは、子ども自身の回答から不登校傾向を見ていくこととする。本調査では、「あなたは、これまでに以下のようなことがありましたか。」という質問にて、「1年間の合計で30日以上学校を休んだ（病気の時をのぞく）」ことがあるかを聞いた。その結果、「よくあった」と回答した割合は5.6%、「時々あった」と回答した割合は2.6%、合わせて8.2%、不登校経験がある子どもが存在した。

図表 5-3-1 不登校経験：全体、生活困難度別(X)

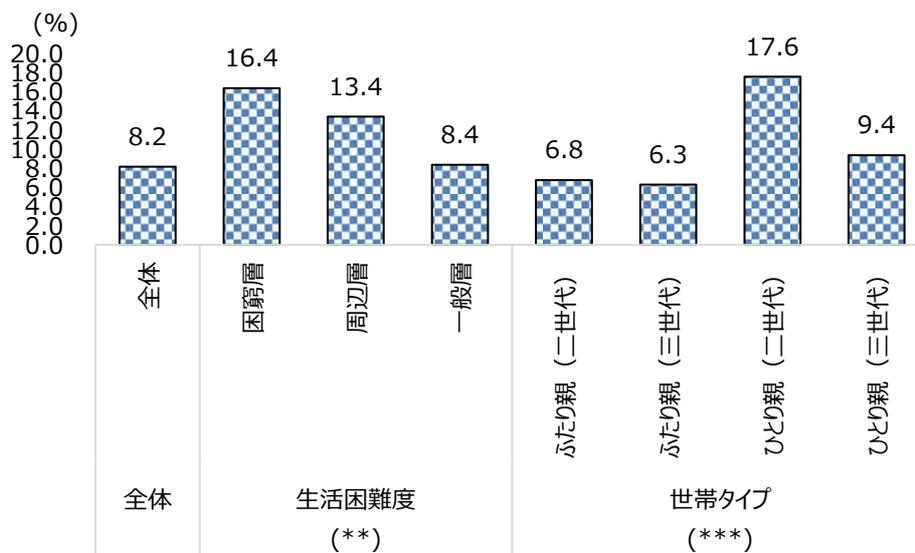


図表 5-3-2 不登校経験：全体、世帯タイプ別(X)



生活困難度別・世帯タイプ別いずれもそのままでは統計的に有意な傾向は確認されなかったが、「よくあった」「時々あった」と回答したか否かということについて検定を行ったところ、いずれも統計的に有意な傾向が確認された。生活困難度が高いほど「よくあった」「時々あった」を選択した割合が高く、一般層では 8.4%であったのに対し、困窮層では 16.4%にのぼった。また、世帯タイプ別では、ひとり親（二世帯）世帯に属する子どもの 17.6%が「よくあった」「時々あった」と回答していた。

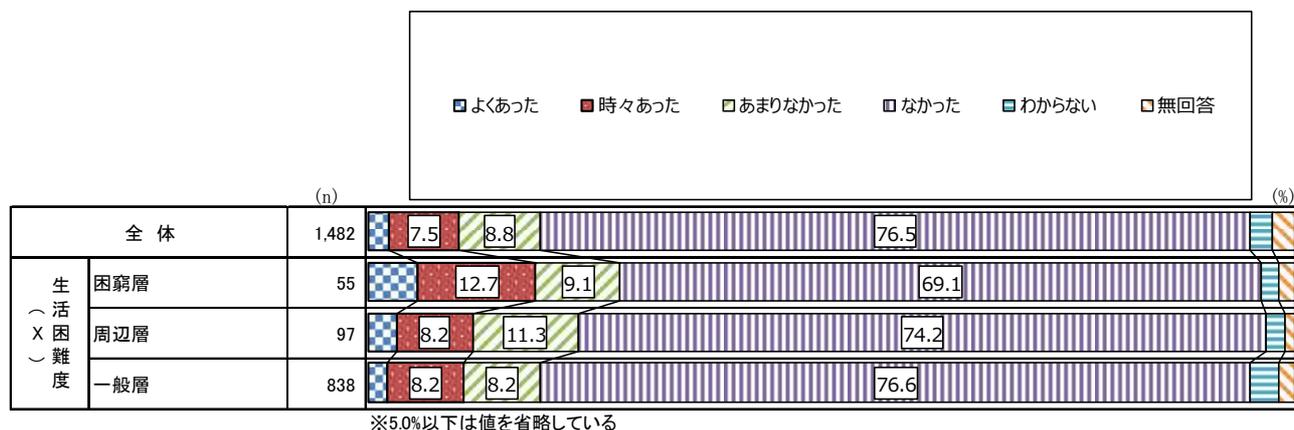
図表 5-3-4 不登校経験が「よくあった」「時々あった」割合
：全体、生活困難度別(**)、世帯タイプ別(***)



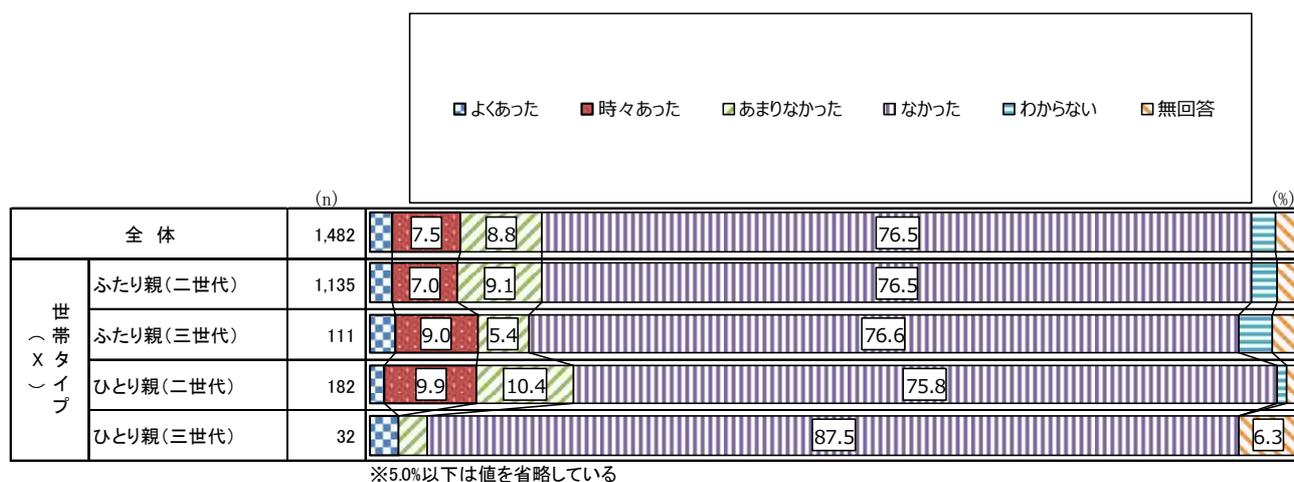
(2) いじめられた経験

次に、子ども自身の回答からいじめられた経験について見ていくこととする。本調査では、「あなたは、これまでに以下のようなことがありましたか。」という質問にて、「いじめられた」とあるかを聞いた。その結果、「よくあった」と回答した割合は 2.4%、「時々あった」と回答した割合は 7.5%、合わせて 9.9%、いじめられた経験がある子どもが存在した。なお、生活困難度別・世帯タイプ別には、統計的に有意な差は確認できなかった。

図表 5-3-5 いじめられた経験：全体、生活困難度別(X)



図表 5-3-6 いじめられた経験：全体、世帯タイプ別(X)



図表 5-3-7 いじめられた経験：全体、生活困難度別(X)、世帯タイプ別(X)

		該当数	よくあった	時々あった	あまりなかった	なかった	わからない	無回答
全体		1,482 100.0	35 2.4	111 7.5	130 8.8	1,134 76.5	37 2.5	35 2.4
生活 (X X X) 困難 度	困窮層	55 100.0	3 5.5	7 12.7	5 9.1	38 69.1	1 1.8	1 1.8
	周辺層	97 100.0	3 3.1	8 8.2	11 11.3	72 74.2	2 2.1	1 1.0
	一般層	838 100.0	18 2.1	69 8.2	69 8.2	642 76.6	25 3.0	15 1.8
世帯 (X X X) タイプ	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	28 2.5	80 7.0	103 9.1	868 76.5	31 2.7	25 2.2
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	3 2.7	10 9.0	6 5.4	85 76.6	4 3.6	3 2.7
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	3 1.6	18 9.9	19 10.4	138 75.8	2 1.1	2 1.1
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	1 3.1	0 0.0	1 3.1	28 87.5	0 0.0	2 6.3

4. 進学意向

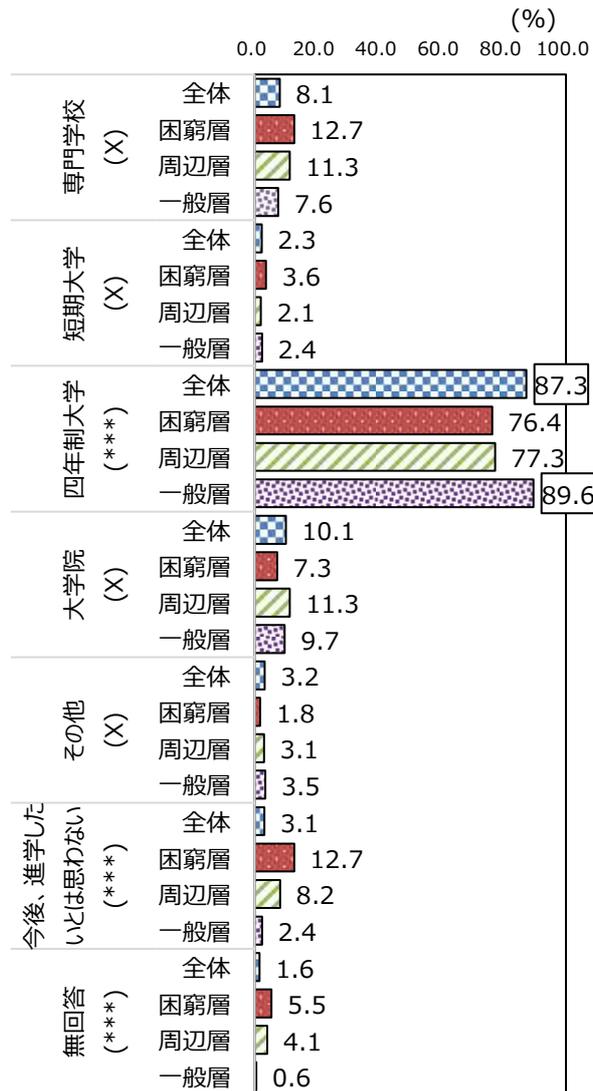
(1) 希望する進学先

子ども本人に「あなたは今後、希望する進学先がありますか。」と聞いたところ、「専門学校」に進学したいと回答した割合は 8.1%、「短期大学」は 2.3%、「四年制大学」は 87.3%、「大学院」は 10.1%、「その他」は 3.2%、「今後、進学したいとは思わない」は 3.1%であった。

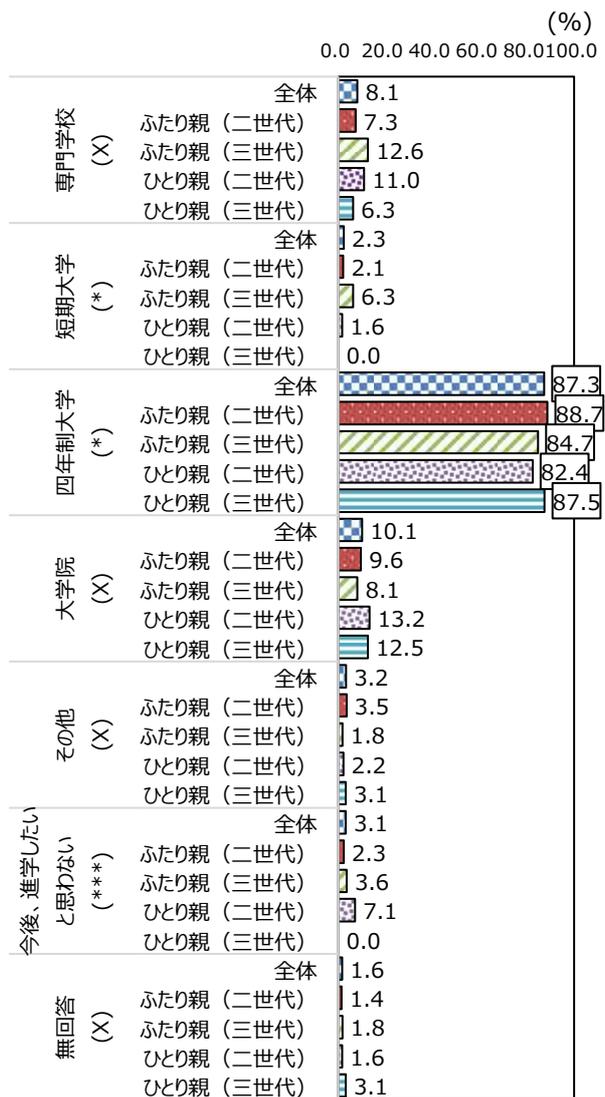
生活困難度別に見ると、「四年制大学」および「今後、進学したいとは思わない」にて統計的に有意な差が確認された。「四年制大学」は一般層では 89.6%が進学希望を示したのに対し、困窮層で進学を希望する割合は 76.4%にとどまった。また、「今後、進学したいとは思わない」と考える割合が一般層では 2.4%であったのに対し、困窮層では 12.7%にのぼった。ただし、困窮層でも 8 割強が四年制大学への進学を希望しており、今後、進学したいとは思わない子どもが 1 割強にとどまることは重要である。

世帯タイプ別に見ると、「四年制大学」および「今後、進学したいとは思わない」にて統計的に有意な差が確認された。「四年制大学」に進学したいひとり親（二世代）世帯の子どもは 82.4%と全体と比較して低く、また、ひとり親（二世代）世帯で進学したいと思わない割合が 7.1%と、全体と比較して高い割合であった。ただし、ひとり親（二世代）世帯でも 8 割強が四年制大学への進学を希望しており、今後、進学したいとは思わない子どもが 1 割強にとどまることは重要である。

図表 5-4-1 希望する進学先：全体、生活困難度別



図表 5-4-2 希望する進学先：全体、世帯タイプ別



図表 5-4-3 希望する進学先：全体、生活困難度別、世帯タイプ別

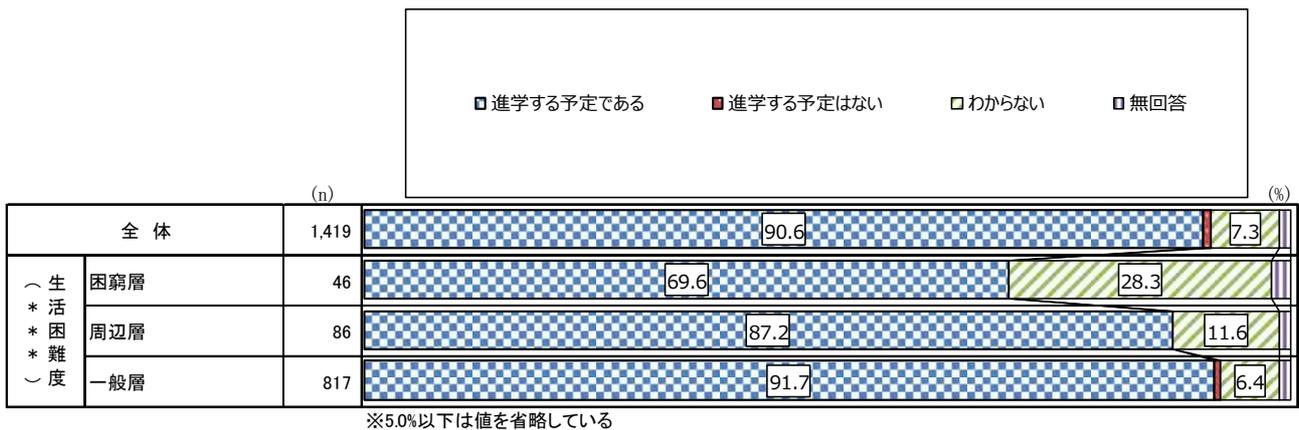
		該当数	専門学校	短期大学	四年制大学	大学院	その他	わ今後、進学したいとは思わない	無回答
全体		1,479 100.0	120 8.1	34 2.3	1,291 87.3	149 10.1	48 3.2	46 3.1	24 1.6
生活困難度	困窮層	55 100.0	7 12.7	2 3.6	42 76.4	4 7.3	1 1.8	7 12.7	3 5.5
	周辺層	97 100.0	11 11.3	2 2.1	75 77.3	11 11.3	3 3.1	8 8.2	4 4.1
	一般層	837 100.0	64 7.6	20 2.4	750 89.6	81 9.7	29 3.5	20 2.4	5 0.6
世帯タイプ	ふたり親(二世代)	1,132 100.0	83 7.3	24 2.1	1,004 88.7	109 9.6	40 3.5	26 2.3	16 1.4
	ふたり親(三世代)	111 100.0	14 12.6	7 6.3	94 84.7	9 8.1	2 1.8	4 3.6	2 1.8
	ひとり親(二世代)	182 100.0	20 11.0	3 1.6	150 82.4	24 13.2	4 2.2	13 7.1	3 1.6
	ひとり親(三世代)	32 100.0	2 6.3	0 0.0	28 87.5	4 12.5	1 3.1	0 0.0	1 3.1

(2) 子どもの進学予定

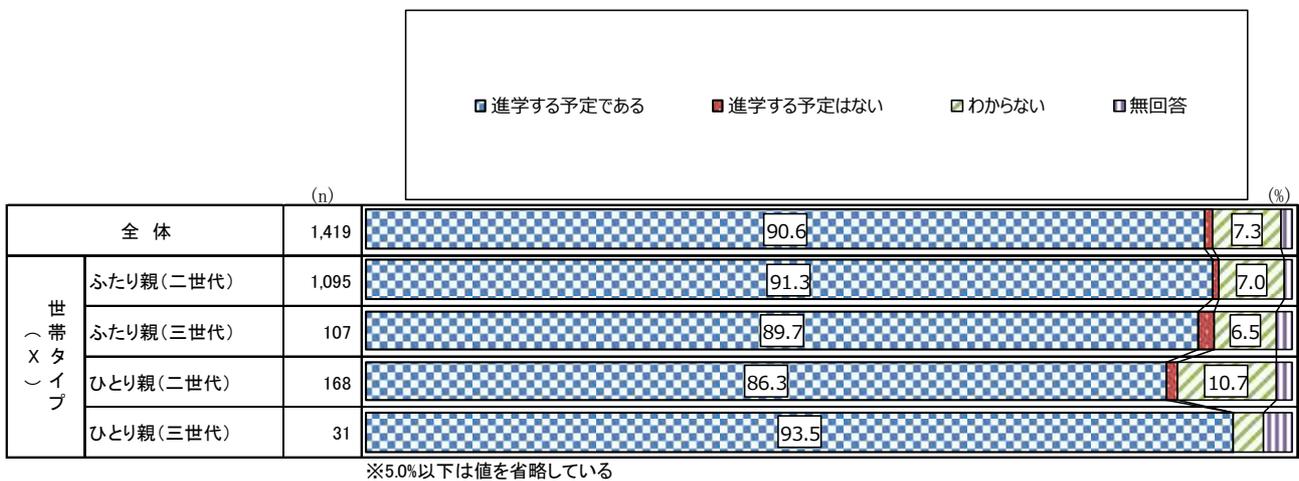
次に、希望する進学先のうち、実際に進学する予定があるかを聞いたところ、全体の 90.6%が「進学する予定である」と回答したが、「進学する予定はない」は 0.8%、「わからない」は 7.3%あり、進学の希望があるにもかかわらず叶えられない、あるいは叶えられるかどうか分からない子どもが一定数存在することが分かる。

生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が確認され、「進学する予定がある」は一般層では 91.7%であったのに対し、困窮層では 69.6%と 22.1 ポイントの差があった。一方、世帯タイプ別には統計的に有意な差は確認されなかった。

図表 5-4-4 子どもの進学予定：全体、生活困難度別(***)



図表 5-4-5 子どもの進学予定：全体、世帯タイプ別(X)

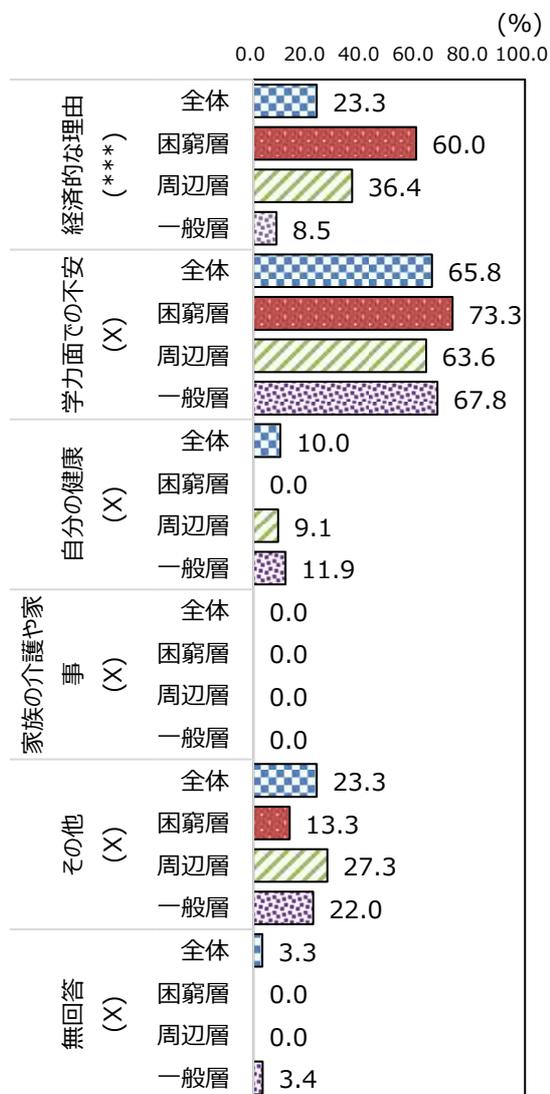


図表 5-4-6 子どもの進学予定：全体、生活困難度別(***)、世帯タイプ別(X)

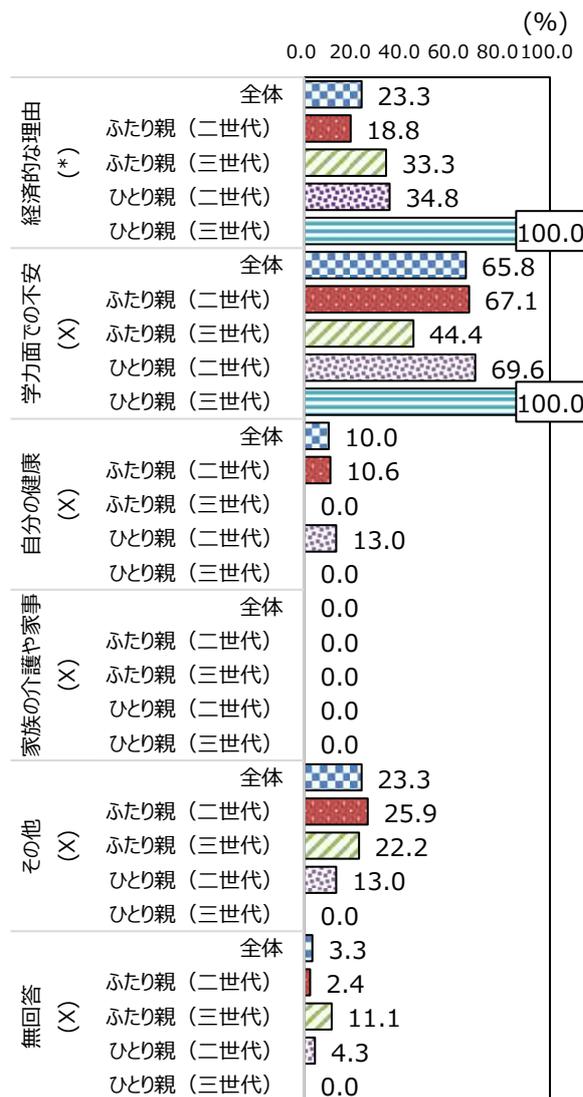
		該当数	進学する予定である	進学する予定はない	わからない	無回答
全体		1,419 100.0	1,285 90.6	12 0.8	104 7.3	18 1.3
（生活困難度）	困窮層	46 100.0	32 69.6	0 0.0	13 28.3	1 2.2
	周辺層	86 100.0	75 87.2	0 0.0	10 11.6	1 1.2
	一般層	817 100.0	749 91.7	6 0.7	52 6.4	10 1.2
（世帯タイプ）	ふたり親(二世代)	1,095 100.0	1,000 91.3	7 0.6	77 7.0	11 1.0
	ふたり親(三世代)	107 100.0	96 89.7	2 1.9	7 6.5	2 1.9
	ひとり親(二世代)	168 100.0	145 86.3	2 1.2	18 10.7	3 1.8
	ひとり親(三世代)	31 100.0	29 93.5	0 0.0	1 3.2	1 3.2

n 値が小さいためあくまでも参考値だが、「進学する予定はない」「わからない」と回答した場合に、その理由を聞いたところ、「経済的な理由」が 23.3%、「学力面での不安」が 65.8%、「自分の健康」が 10.0%、「家族の介護や家事」は 0.0%、「その他」が 23.3%であった。生活困難層やひとり親世帯で「経済的な理由」を挙げる割合が高く、統計的に有意な差が確認された。

図表 5-4-7 進学予定がない・わからない理由：全体、生活困難度別



図表 5-4-8 進学予定がない・わからない理由：全体、世帯タイプ別



図表 5-4-9 進学予定がない・わからない理由：全体、生活困難度別、世帯タイプ別

		該当数	経済的な理由	学力面での不安	自分の健康	家族の介護や家事	その他	無回答
全体		120 100.0	28 23.3	79 65.8	12 10.0	0 0.0	28 23.3	4 3.3
生活困難度	困窮層	15 100.0	9 60.0	11 73.3	0 0.0	0 0.0	2 13.3	0 0.0
	周辺層	11 100.0	4 36.4	7 63.6	1 9.1	0 0.0	3 27.3	0 0.0
	一般層	59 100.0	5 8.5	40 67.8	7 11.9	0 0.0	13 22.0	2 3.4
世帯タイプ	ふたり親(二世帯)	85 100.0	16 18.8	57 67.1	9 10.6	0 0.0	22 25.9	2 2.4
	ふたり親(三世帯)	9 100.0	3 33.3	4 44.4	0 0.0	0 0.0	2 22.2	1 11.1
	ひとり親(二世帯)	23 100.0	8 34.8	16 69.6	3 13.0	0 0.0	3 13.0	1 4.3
	ひとり親(三世帯)	1 100.0	1 100.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

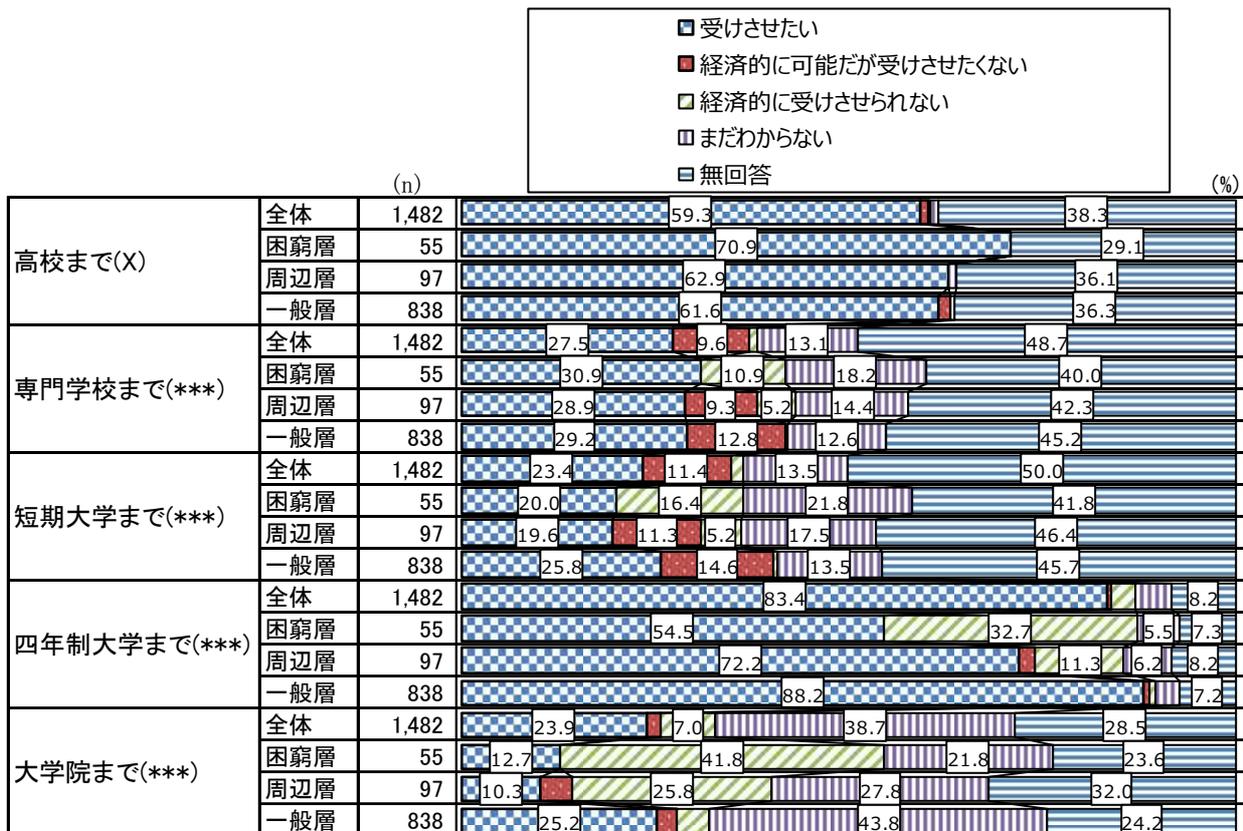
(3) 保護者の進学期待

次に、保護者に対して「子どもにどの段階までの教育を受けさせたいか」を聞いた。「四年制大学まで」に注目して分析を行った結果、全体では、「四年制大学まで」受けさせたいと回答した割合は83.4%であった。

生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が確認され、一般層では88.2%が四年制大学までの教育を「受けさせたい」と回答したのに対し、困窮層では54.5%にとどまり、反対に「経済的に受けさせられない」と回答した割合は、一般層では0.6%であったのに対し、困窮層では32.7%にのぼった。

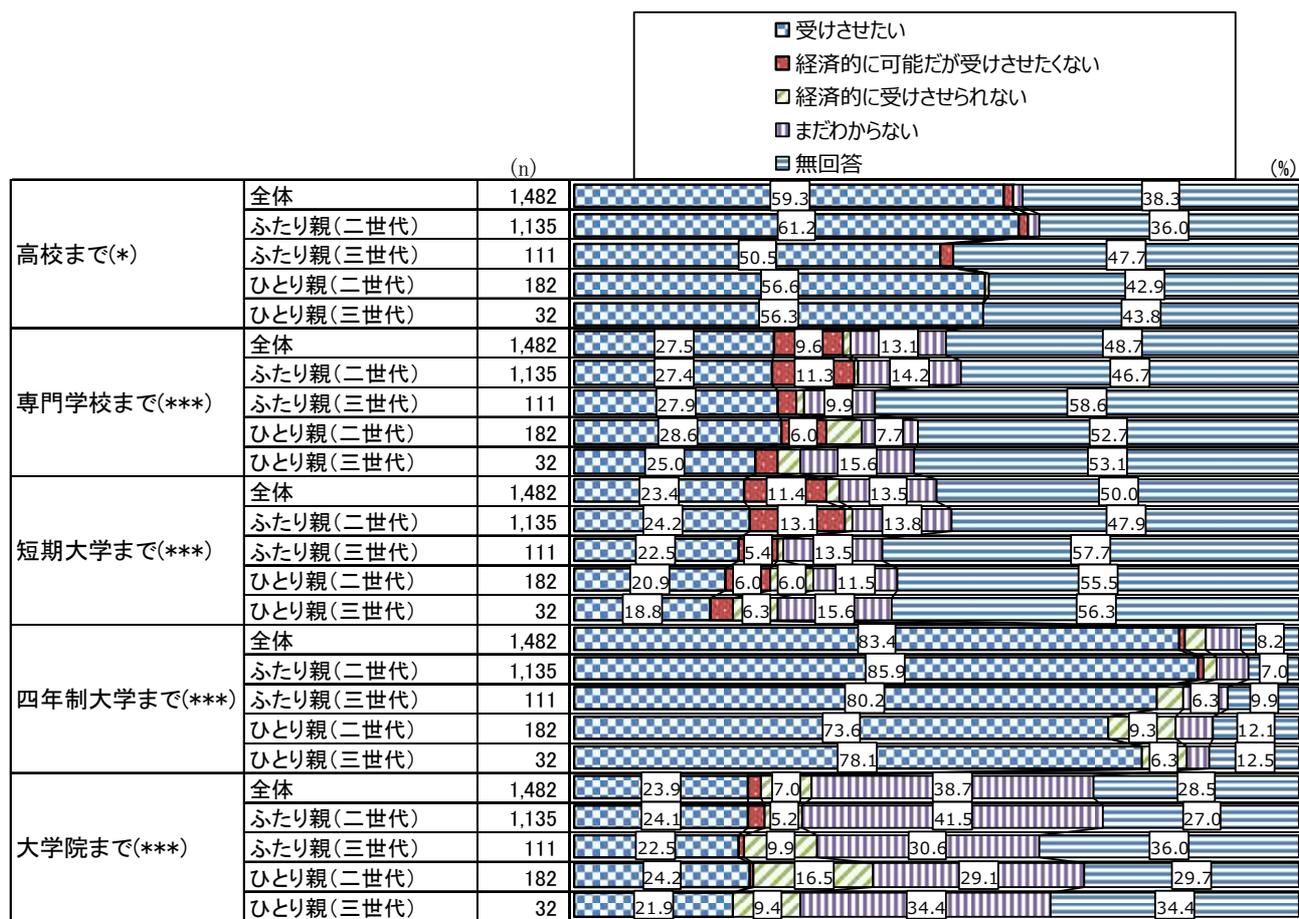
世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差が確認され、四年制大学までの教育を「受けさせたい」と回答した割合がひとり親（二世帯）世帯では73.6%、ひとり親（三世帯）世帯では78.1%にとどまり、全体と比較して少なかった。

図表 5-4-10 保護者の進学期待：全体、生活困難度別



※5.0%以下は値を省略している

図表 5-4-11 保護者の進学期待：全体、世帯タイプ別



※5.0%以下は値を省略している

図表 5-4-12 保護者の進学期待：全体、生活困難度別

		該当数	受けさせたい	経済的に受けさせたいが受けさせられない	経済的に受けさせられない	まだわからない	無回答
高校まで (X)	全体	1,482 100.0	879 59.3	16 1.1	2 0.1	17 1.1	568 38.3
	困窮層	55 100.0	39 70.9	0 0.0	0 0.0	0 0.0	16 29.1
	周辺層	97 100.0	61 62.9	0 0.0	0 0.0	1 1.0	35 36.1
	一般層	838 100.0	516 61.6	14 1.7	0 0.0	4 0.5	304 36.3
専門学校まで (****)	全体	1,482 100.0	407 27.5	143 9.6	16 1.1	194 13.1	722 48.7
	困窮層	55 100.0	17 30.9	0 0.0	6 10.9	10 18.2	22 40.0
	周辺層	97 100.0	28 28.9	9 9.3	5 5.2	14 14.4	41 42.3
	一般層	838 100.0	245 29.2	107 12.8	1 0.1	106 12.6	379 45.2
短期大学まで (****)	全体	1,482 100.0	347 23.4	169 11.4	25 1.7	200 13.5	741 50.0
	困窮層	55 100.0	11 20.0	0 0.0	9 16.4	12 21.8	23 41.8
	周辺層	97 100.0	19 19.6	11 11.3	5 5.2	17 17.5	45 46.4
	一般層	838 100.0	216 25.8	122 14.6	4 0.5	113 13.5	383 45.7
四年制大学まで (****)	全体	1,482 100.0	1,236 83.4	10 0.7	45 3.0	69 4.7	122 8.2
	困窮層	55 100.0	30 54.5	0 0.0	18 32.7	3 5.5	4 7.3
	周辺層	97 100.0	70 72.2	2 2.1	11 11.3	6 6.2	8 8.2
	一般層	838 100.0	739 88.2	7 0.8	5 0.6	27 3.2	60 7.2
大学院まで (****)	全体	1,482 100.0	354 23.9	28 1.9	103 7.0	574 38.7	423 28.5
	困窮層	55 100.0	7 12.7	0 0.0	23 41.8	12 21.8	13 23.6
	周辺層	97 100.0	10 10.3	4 4.1	25 25.8	27 27.8	31 32.0
	一般層	838 100.0	211 25.2	22 2.6	35 4.2	367 43.8	203 24.2

図表 5-4-13 保護者の進学期待：全体、世帯タイプ別

		該当数	受けさせたい	経済的に受けさせたい可能性が低い	経済的に受けさせられない	まだわからない	無回答
(*) 高校まで	全体	1,482 100.0	879 59.3	16 1.1	2 0.1	17 1.1	568 38.3
	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	695 61.2	14 1.2	1 0.1	16 1.4	409 36.0
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	56 50.5	2 1.8	0 0.0	0 0.0	53 47.7
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	103 56.6	0 0.0	1 0.5	0 0.0	78 42.9
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	18 56.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	14 43.8
	(** *) 専門学校まで	全体	1,482 100.0	407 27.5	143 9.6	16 1.1	194 13.1
ふたり親(二世帯)		1,135 100.0	311 27.4	128 11.3	5 0.4	161 14.2	530 46.7
ふたり親(三世帯)		111 100.0	31 27.9	3 2.7	1 0.9	11 9.9	65 58.6
ひとり親(二世帯)		182 100.0	52 28.6	11 6.0	9 4.9	14 7.7	96 52.7
ひとり親(三世帯)		32 100.0	8 25.0	1 3.1	1 3.1	5 15.6	17 53.1
(** *) 短期大学まで		全体	1,482 100.0	347 23.4	169 11.4	25 1.7	200 13.5
	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	275 24.2	149 13.1	10 0.9	157 13.8	544 47.9
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	25 22.5	6 5.4	1 0.9	15 13.5	64 57.7
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	38 20.9	11 6.0	11 6.0	21 11.5	101 55.5
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	6 18.8	1 3.1	2 6.3	5 15.6	18 56.3
	(** *) 四年制大学まで	全体	1,482 100.0	1,236 83.4	10 0.7	45 3.0	69 4.7
ふたり親(二世帯)		1,135 100.0	975 85.9	9 0.8	22 1.9	49 4.3	80 7.0
ふたり親(三世帯)		111 100.0	89 80.2	0 0.0	4 3.6	7 6.3	11 9.9
ひとり親(二世帯)		182 100.0	134 73.6	0 0.0	17 9.3	9 4.9	22 12.1
ひとり親(三世帯)		32 100.0	25 78.1	0 0.0	2 6.3	1 3.1	4 12.5
(** *) 大学院まで		全体	1,482 100.0	354 23.9	28 1.9	103 7.0	574 38.7
	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	273 24.1	25 2.2	59 5.2	471 41.5	307 27.0
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	25 22.5	1 0.9	11 9.9	34 30.6	40 36.0
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	44 24.2	1 0.5	30 16.5	53 29.1	54 29.7
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	7 21.9	0 0.0	3 9.4	11 34.4	11 34.4

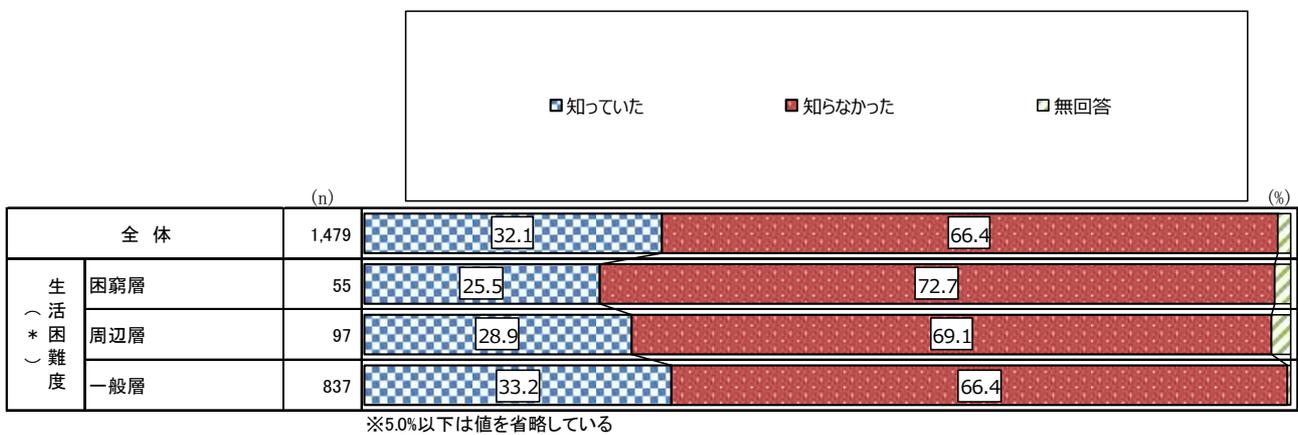
(4) 子ども本人の高等教育の修学支援新制度の認知と利用意向

子ども本人に、高等教育の修学支援新制度の認知と利用意向について聞いた。認知については、「知っていた」割合が32.1%、「知らなかった」割合が66.4%であった。他方で、利用意向については、「利用したい」割合が22.5%、「利用したくない」割合が2.6%、「未定」が25.6%、「利用対象に該当しないと思う」が47.3%であった。

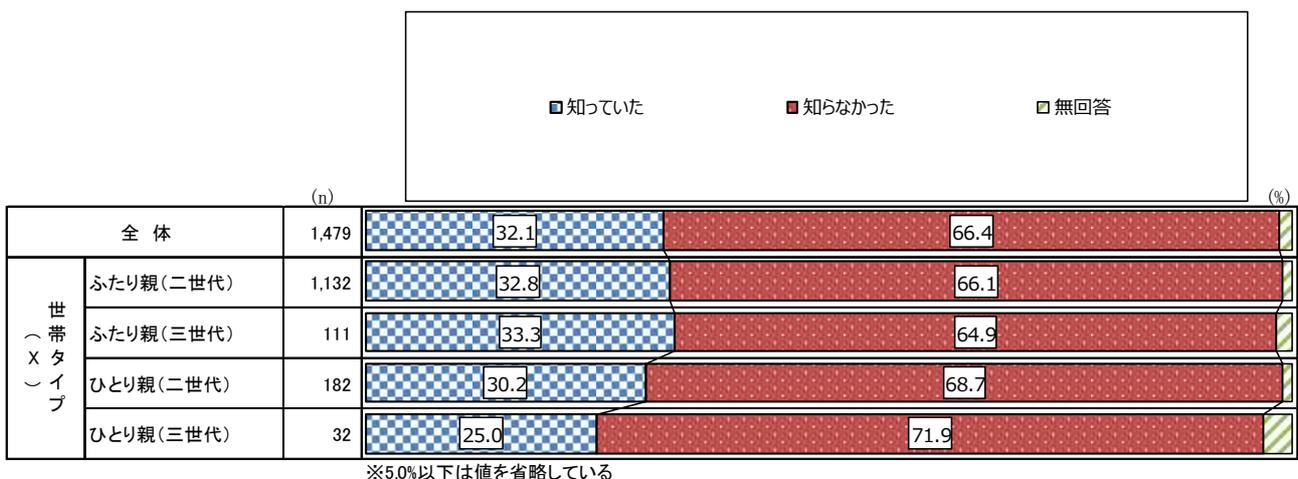
認知について生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が確認され、「知っていた」割合が一般層では33.2%であったが、困窮層では25.5%にとどまる。一方で、利用意向について生活困難度別に見ると、こちらも統計的に有意な差が確認され、「利用したい」割合が一般層では19.7%であったが、困窮層では54.5%にのぼる。すなわち、本来制度へのニーズが高く、ターゲットとなるはずの層に、情報が行き届いていない状況にあると分かる。

世帯タイプ別に見ると、認知については統計的に有意な差は確認されなかったが、利用意向について統計的に有意な差が確認された。「利用したい」と回答した割合が、ひとり親（二世帯）世帯では43.4%、ひとり親（三世帯）世帯では40.6%にのぼる。

図表 5-4-14 子ども本人の高等教育の修学支援新制度の認知：全体、生活困難度別(*)



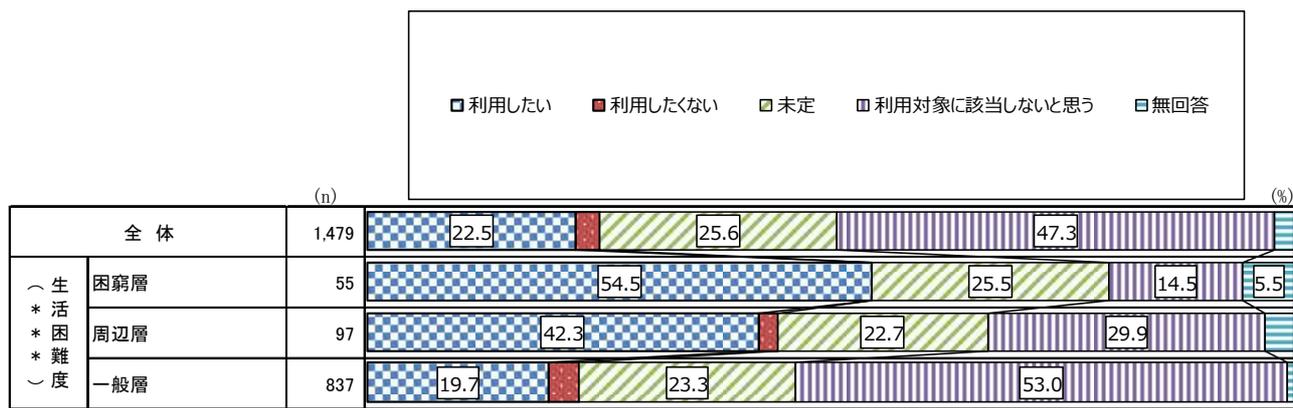
図表 5-4-15 子ども本人の高等教育の修学支援新制度の認知：全体、世帯タイプ別(X)



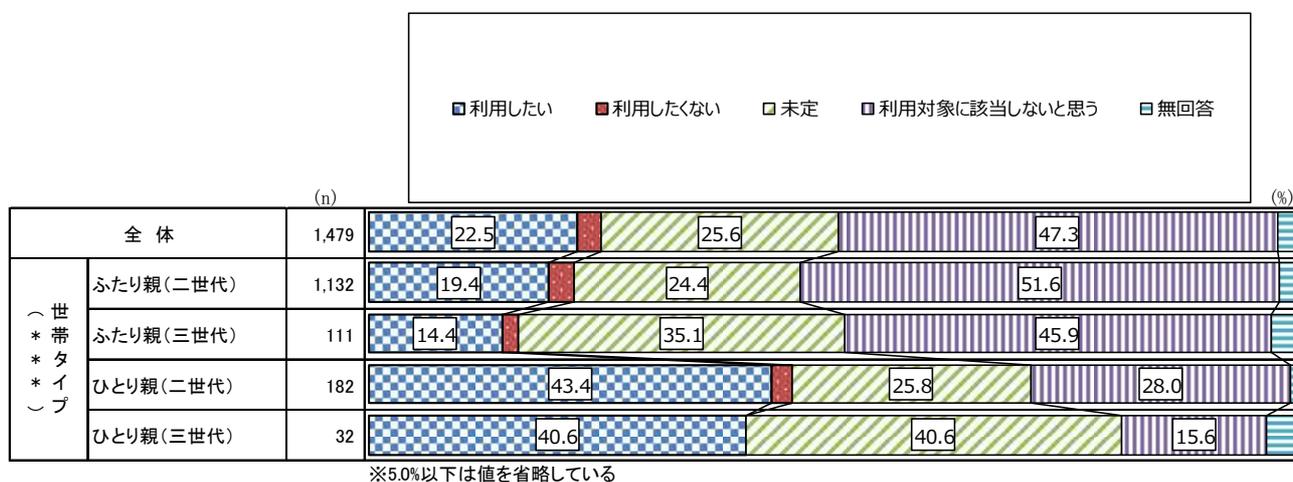
図表 5-4-16 子ども本人の高等教育の修学支援新制度の認知
 : 全体、生活困難度別(*)、世帯タイプ別(X)

		該当数	知っていた	知らなかった	無回答
全 体		1,479 100.0	475 32.1	982 66.4	22 1.5
生活 (*)困難 度	困窮層	55 100.0	14 25.5	40 72.7	1 1.8
	周辺層	97 100.0	28 28.9	67 69.1	2 2.1
	一般層	837 100.0	278 33.2	556 66.4	3 0.4
世帯 (X)タイプ	ふたり親(二世代)	1,132 100.0	371 32.8	748 66.1	13 1.1
	ふたり親(三世代)	111 100.0	37 33.3	72 64.9	2 1.8
	ひとり親(二世代)	182 100.0	55 30.2	125 68.7	2 1.1
	ひとり親(三世代)	32 100.0	8 25.0	23 71.9	1 3.1

図表 5-4-17 子ども本人の高等教育の修学支援新制度の利用意向：全体、生活困難度別(***)



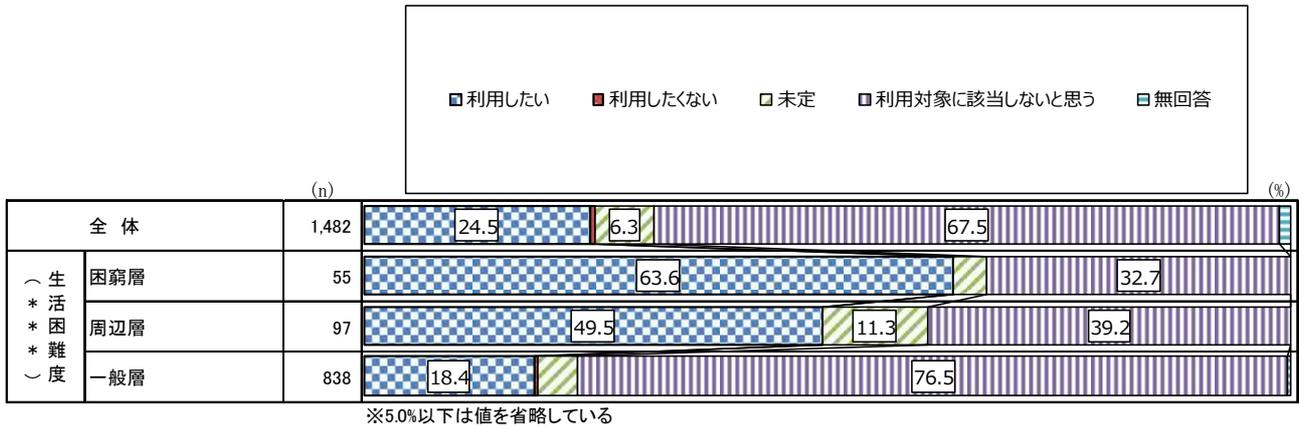
図表 5-4-18 子ども本人の高等教育の修学支援新制度の利用意向：全体、世帯タイプ別(***)



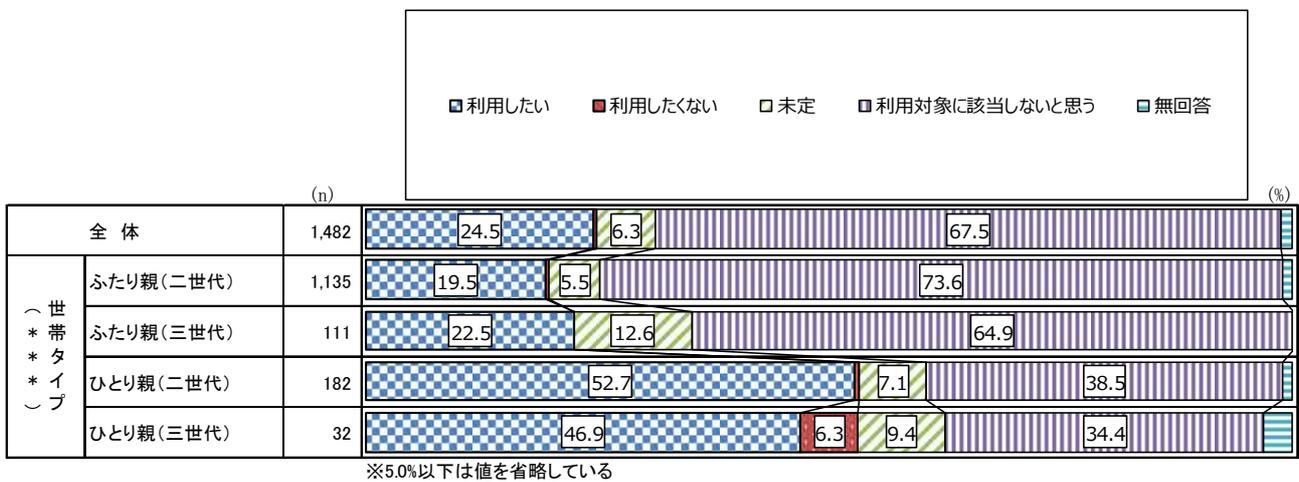
図表 5-4-22 保護者の高等教育の修学支援新制度の認知：全体、生活困難度別(X)、世帯タイプ別(X)

		該当数	知っていた	知らなかった	無回答
全体		1,482 100.0	1,103 74.4	363 24.5	16 1.1
生活困難度 (X)	困窮層	55 100.0	42 76.4	13 23.6	0 0.0
	周辺層	97 100.0	75 77.3	22 22.7	0 0.0
	一般層	838 100.0	637 76.0	195 23.3	6 0.7
世帯タイプ (X)	ふたり親(二世帯)	1,135 100.0	851 75.0	270 23.8	14 1.2
	ふたり親(三世帯)	111 100.0	85 76.6	26 23.4	0 0.0
	ひとり親(二世帯)	182 100.0	135 74.2	47 25.8	0 0.0
	ひとり親(三世帯)	32 100.0	21 65.6	11 34.4	0 0.0

図表 5-4-23 保護者の高等教育の修学支援新制度の利用意向：全体、生活困難度別(***)



図表 5-4-24 保護者の高等教育の修学支援新制度の利用意向：全体、世帯タイプ別(***)



5. まとめ

(1) 子どもの学習状況

就学状況については、定時制に在籍している割合が 1.9%、通信制に在籍している割合が 6.4%、特別支援学校に在籍している割合が 1.1%と、合わせて 1 割弱がこれらの学級に在籍している。また、中途退学した子どもも 0.3%存在する（**図表 5-1-1、図表 5-1-3**）。

授業の理解度については、学校の授業が「あまりわからない」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」と 1 割強が回答しており、学習に課題を抱える子どもが一定数存在することが分かる。特に、困窮層にて授業の理解度が低い傾向が見られた（**図表 5-1-4、図表 5-1-6**）。また、高校 1 年生や高校 2 年生になってから授業がわからなくなったと回答している子どもが 3 割強存在することも特徴的である（**図表 5-1-7、図表 5-1-9**）。このことは、義務教育段階のみならず、高校生世代に対する学習支援も重要であることを示唆している。

平日の学習時間について見ると、「まったくしない」割合が 12.0%、「30 分より少ない」割合が 11.0%、「30 分以上、1 時間より少ない」割合が 25.9%であった。また、困窮層やひとり親（二世帯）世帯にて勉強時間が短い傾向が見られた（**図表 5-1-10、図表 5-1-11、図表 5-1-12**）。

自宅における物理的な学習環境については、概ね良好であるものの、一部の子どもにてその欠如が見られる。「家の中で宿題をすることができる場所」については、9 割以上が「ある」ものの、約 3%の子どもは所有しておらず、「ほしい（したい）」と回答している。なお、困窮層では「ほしい（したい）」の割合は 16.4%にのぼる（**図表 5-1-13、図表 5-1-15**）。

塾や家庭教師を利用している子どもの割合は全体的に高く、無回答を除いても約 5 割にのぼる。週 4 日以上通塾している割合は約 1 割存在する。通塾率と通塾日数は生活困難度や世帯タイプの影響を大きく受けており、塾や家庭教師を利用していない子供は、一般層では 47.0%であったのに対し困窮層では 74.5%、ふたり親（二世帯）世帯では 46.6%であったのに対しひとり親（二世帯）世帯では 64.3%であった（**図表 5-1-16、図表 5-1-17、図表 5-1-18**）。

(2) 無料学習支援の利用意向

無料学習支援の利用状況については、「利用したことがある」子どもの割合が 1.4%にとどまった一方、「利用の仕方が分からなかった」割合は 5.9%であり、「これについて全く知らなかった」割合は 40.6%であった。

また、生活困難度別に見ると「利用したいと思わなかった」割合は生活が困窮するほど低く、困窮層にてより高いニーズが確認できる一方、「これについて全く知らなかった」割合も同様に生活が困窮するほど高かったことは重要である（**図表 5-2-1、図表 5-2-3**）。塾や家庭教師の有無にて、生活困難度が高いほど通塾率が低く、また通塾頻度が少ない傾向が見られたことをふまえると、ニーズが高い層にこそ情報が伝わっていないことを示唆している。

また、「無料学習支援」「低額・無料で、通信教育が受けられるサービス」「家から出て学校に通うことができる低額・無料の寮」といった学習支援事業については、それぞれ 26.1%・36.0%・25.2%の子どもが利用意向を示している。特に、困窮層やひとり親（二世帯）世帯で利用ニーズが高く、「無料学習支援」「低額・無料で、通信教育が受けられるサービス」「家から出て学校に通うことができる低額・無料の寮」については、困窮層ではそれぞれ 38.2%・58.2%・43.6%が「使ってみたい」「興味がある」と回答しており、また、「低額・無料で、通信教育が受けられるサービス」については、ひとり親（二世帯）では 44.0%が「使ってみたい」「興味がある」と回答していた。このように、利用したことがある割合は低くても、困窮層やひとり親世帯を中心に潜在的なニーズは高いことが分かり、事業の拡充と周知が重要である可能性がある（**図表 5-2-4、図表 5-2-5、図表 5-2-6、図表 5-2-7、図表 5-2-8、図表 5-2-9、図表 5-2-10**）。

(3) 不登校・いじめの経験

実際に、不登校を経験したと認識している子どもは全体では8.2%である。ただし、困窮層とひとり親（二世帯）世帯においてはその割合は高くなり、それぞれ16.4%、17.6%にもものぼった。困窮層・ひとり親世帯を中心に、このような子どもに対するケアが重要である（**図表 5-3-1**、**図表 5-3-2**、**図表 5-3-3**、**図表 5-3-4**）。

また、いじめについては、「いじめられた」ことが「よくあった」「時々あった」と答えた子どもの割合は9.9%である。いじめの経験は、生活困難度や世帯タイプに関連しておらず、家庭の経済状況に関わらず、全ての子どもについて同様に配慮する必要があると言える（**図表 5-3-5**、**図表 5-3-6**、**図表 5-3-7**）。

(4) 高校卒業後の進学と高等教育の修学支援新制度

子ども本人は、87.3%と高い割合で四年制大学への進学を希望している。この割合は困窮層では76.4%と、全体と比較すると低いものの、それでも多くの高校生世代が四年制大学への進学を希望している状況がある（**図表 5-4-1**、**図表 5-4-3**）。一方で、進学の希望があるにもかかわらず、「進学する予定がない」「わからない」と回答する子どもが1割程度存在することも重要である（**図表 5-4-4**、**図表 5-4-6**）。

また、保護者の進学期待を見ても、子どもにどの段階までの教育を受けさせたいか聞いたところ、四年制大学まで受けさせたい割合は全体では83.4%にもものぼったが、困窮層ではわずか54.5%であり、「経済的に受けさせられない」と回答した割合は全体ではわずか3.0%であったのに対し、困窮層では32.7%にもものぼった（**図表 5-4-10**、**図表 5-4-12**）。

このような経済的支援のための制度として、文部科学省は高等教育の修学支援新制度を令和2年4月に創設した。しかし、保護者は7割以上が制度を認知していたものの（**図表 5-4-20**、**図表 5-4-22**）、子ども本人では、制度の存在を知っていた割合は32.1%にとどまり、過半数は知らない状況にあった。制度の対象となる生活困難層ほど修学支援新制度の認知度が低く、修学支援新制度の存在を知っていた困窮層の子どもは25.5%にとどまっている（**図表 5-4-14**、**図表 5-4-16**）。子ども本人に利用意向を聞いたところ、全体では22.5%が「利用したい」と回答しているのに対し、困窮層では54.5%にもものぼった。困窮層に向けた制度の周知が課題であると考えられる（**図表 5-4-17**、**図表 5-4-19**）。